

## 資料紹介

# 西田直二郎日記（1）

入山洋子 †

### はじめに

西田直二郎は大正から昭和初期にかけて活躍した歴史家である。哲学、考古学、人類学、民俗学等、歴史学の周辺学問にも多大な関心を持ち、当代の学者や文化人、郷土史家などの豊かな交流を通じ、歴史上に展開された人間社会のあり方を問い続けた文化史学者である。西田の学問や人となりについて、幾許かの研究蓄積があるが、いまその日記を読むことで、その生きざま、研究生活が生き生きと蘇ってくる。

内田銀蔵をはじめとする京都帝国大学草創期の教授陣に鍛えられ、学部学科を超えた学友らと、時には菓子を食べながら夜遅くまで議論し、研究者としての実績を積んでいった西田のもとには、大正の末から昭和初期にかけて、その新しい学問に惹きつけられて多くの学生が集まった。京都帝大での授業や学務のほか、龍谷大学、大阪女子専門学校などでも講義し、傍ら卒業生の就職や学内人事に労を執る。当代有数の史学者の地位を確立した西田の影響力は学内にとどまらず、戦争遂行の国策に則って最大限に引き出された。

敗戦後、教職不適格の指定を受け京都帝大を追われた西田は、指定解除を待ち望みながら、在野での定期的な講義・講演活動や子弟との研究会に忙しく過ごし、戦後の食糧難を生き抜いた。一方で、

西日本かるた連盟理事長<sup>(1)</sup>として小倉百人一首に傾倒する姿も詳細に記録される。

西田の学問の評価としては、1970年代までの研究が現在でもほぼ定説となっている。個別の歴史的事実にこだわらず時代全体の普遍的精神を明らかにしようとした点において、史学史上重要な位置を占める、と高く評価される一方で、理論自体に皇国史観に陥る可能性をはらんでいた、とされる<sup>(2)</sup>。2000年代に入ると、より広い視点から西田を再評価しようとする動きが出てきた。門下生への影響力の大きさが指摘され、民俗学への関心、史蹟・郷土史の取り組みといった方面での研究が進んだ<sup>(3)</sup>。佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵の「西田直二郎旧蔵資料」を分析した斉藤利彦氏は、1920～22年のヨーロッパ留学中の生活や心情、留学の成果などの検討によって、生身の西田像を浮かび上がらせた<sup>(4)</sup>。斉藤氏紹介に係る資料は、本資料と相互補完的なものである。

戦争の時代、東京帝国大学の平泉澄に比べると、西田が社会一般に与えた影響力は地味であったが、こと文部省への影響力という点では多大なものがあったとされる。ただその実態については長らく明らかにされてこなかった。天皇制ファシズムの理論的唱道者を分析した宮地正人氏は、「ファシズム期における西田直二郎文化史学の具体的な展

† 名古屋大学博物館 技術補佐員

開過程」を明らかにすることが「歴史学としては最も重要な課題」と認識しつつ十分資料が得られなかったため考察し得なかったという<sup>(5)</sup>。しかし近年、国史編纂事業への関与、日本諸学振興委員会での中心的な役回りなど、少しずつ、この時期の西田の具体的な活動が明らかにされてきている<sup>(6)</sup>。

一方で、戦後の西田の活動についてはほとんど注目されていないのが現状である<sup>(7)</sup>。

本稿は、京都大学大学文書館が所蔵する西田直二郎の日記のうち、一部の年を抽出して翻刻するものである。抽出した年の日記については、抄本ではなくほぼ全てを翻刻し、省略箇所はその都度補註した。

残された日記は、「学生ダイアリー」「博文館当用日記」など専用の日記帳1冊に1年分が記される。内容は、心情の吐露、読書・調査・執筆の記録、京都帝大および他大学等での授業の準備とその内容の記録、研究室・大学内の事情、来宅・訪問などの交友関係、公的職務の記録、と研究生活全般にわたる記録となっている。家庭・親族関係の記載は比較的少ない。年によって記述の量にムラがあり、数日しか記載のない年もあれば、ほぼ毎日書いている年もある。

今回は1911(明治44)、1912(明治45・大正元)、1913(大正2)、1915(大正4)、1919(大正8)年の5年分を紹介する。1886(明治19)12月生まれの直二郎、数えて26歳から34歳までの記録である。以下年を追って内容を簡単に解説する。

## 副手時代の日記

1910年夏に京都帝大文科大学史学科を首席で卒業した西田は、大学院入学と同時に文科大学副手となる。最初の日記は26歳、副手となって半年後のものである。

この年(1911年)の日記は心情を吐き出した記述が多く、後年はこうした記述が少なくなるだけ

に興味深い。大学院に入ると「文化史の研究を一生の業にせうと志した」<sup>(8)</sup>と回想するように、この時すでに研究の方向性を固めていたが、日記には将来への不安や大量の雑務に打ちひしがれながらも、恩師の気遣いを力に自ら奮い立たせ自戒し、教授就任への強い思いを胸に学問に打ち込もうとする青年の心情が活写される。同期の江馬務が西田を「謹直の人」<sup>(9)</sup>と評したが、日記からもまさにそうした人柄を窺い知ることができる。なお、京都帝大の副手規程<sup>(10)</sup>によれば副手は原則無給であるが、多少の報酬を受けていたことが分かる。

翌1912年1月には、京都府皇典講究分所(京都市上京区。神職者養成の私立学校)で神道史・文学史の講義を持ち、秋には大阪高等商業学校(大阪市立)でも教鞭を振るうなど、教員としての生活をスタートしている。

三浦周行が主宰する国史研究室有志の研究会—読史会—の初期の様子は、既に記録が掘り起こされ関係者の回想で語られる。たとえば『読史会二十周年史』(読史会1930.11)には、この年2月16日に三浦宅で記録文章購読の例会が開かれたことが記されているが、日記によると、この日は西田の播州旅行の報告と、栗野秀穂の報告があったことが明らかになる(1912.2.14)。11月には月末開催予定の大会のテーマや会主催の旅行について三浦から相談を受け、西田が実務を担当するなど、同会初期の姿をより立体的に復元することができる。10月11日に「報告第一回ノ上提出」とあるのは、この年の大会の西田報告「京都の心学」に関係するものであろうか。この報告原案は三浦の容れるところとならず、「史学研究ノ法見タヤウナモノ也。国史ト云フハ如何ト思フ故、記録ノ研究ヲ出スベシ」と根底から否定された。「記録」というのは古記録、古文書ということであろう。

内田銀蔵の感化を受け、早くから歴史理論や方法論に関心を寄せていた西田であるが、その後も、「記録研究のことにつき<sup>〔狩野〕</sup>狩の部長より云はる」

(1919.9.30)、「教授会に出で、記録研究のこと説明スル」(1919.10.1)と、大学からは「記録の研究」が求められた。

私生活では、西洋史の津田和一や東洋史の荻山秀雄、理工科大学の小松茂や富永収蔵ら友人と語り、下宿する百万遍知恩寺の塔頭「慶運院」で「牛肉会」を開き(1912.3.16他)、はたまた謡曲の手ほどきを受けるなど(1912.11.12、12.4)、学友と親交を深める様子が記録される。

学友とは、もちろん研究活動においても刺激しあう関係であった。国史専攻の2年後輩にあたる牧野信之助は、卒業後師範学校の職を得て金沢在住であったが、牧野より送付された能登総持寺の世界図が読史会例会での報告に繋がった(1912.12.20、1913.1.27、1.30)。また同じころ“岩橋君の頼み”で上田秋成木像を撮影したり、文科大学講師の富岡謙蔵宅を訪問したりしている。天王寺中学校時代からの親友である岩橋小弥太は、この頃東京の国書刊行会で『上田秋成全集』の編纂に従事していた<sup>(11)</sup>。全集に収録する秋成の「背振翁物語」(茶神物語)や富岡所蔵の秋成肖像画に関し、西田に依頼したものであろう(1912.11.10、1913.1.16、2.2)。

1913年2月には三浦に命じられ東京に史料調査に出掛ける。数日かけて内閣文庫、東京帝国大学史料編纂掛、同国史研究室、近衛家などを訪ね、大乘院日記・兵範記などの調査を行った(1913.1.27、2.3～2.17)。出張中に東京帝大の研究者たちの面識を得ている。平安時代末期の兵部卿平信範の日記「兵範記」は、その自筆本半数が京都帝大の所蔵であったが、残りの半数を、所蔵しているはずの東京近衛邸で搜索することが、出張の一つの目的であった。しかしこの時は見つかることができず、後日、二条城内の近衛家文庫の中から発見される<sup>(12)</sup>。日記中、この年9月末からの「二条城」との記載は、この兵範記の調査と考

えられる。

このころ、兵範記の他に満濟准后日記の解説、平安末の京都の研究などにいそしみ、順調に研究生活を送っていることが分かる。研究成果は、文科大学三科共通の学会「京都文学会」の機関誌『芸文』や、史学科による「史学研究会」の機関誌『史林』などに掲載され、満濟准后日記は『京都帝国大学文科大学叢書4』(全3巻、1918～1920)として刊行された。一方、兎島高德の論考(1913.4)のように、発表には至らなかったものもある。

1915年3月には、初めての単行書となる『修学旅行 京都史蹟案内』(京都帝国大学学友会1915)の原稿に、共著者魚澄惣五郎の助けを得つつ、専念する様子が記録される。後年の回想で、この著作によって「京都市内外の史蹟調査にいたく心を惹かれた」<sup>(13)</sup>というように、この書は西田のライフワークとなった史蹟調査研究の原点である。

1920年からの留学経験は、西田が人類学や民俗学を歴史学研究に取り入れるターニングポイントとなったが<sup>(14)</sup>、人類学雑誌購入の話やオーストラリア原住民の調査(1915.3.16)に見られるように、留学以前はかなり早い時期に人類学への関心を持っていることが分かる。

### 講師、助教授時代の日記

1915年9月に大学院を修了、京都帝大文科大学講師となり、「日本文化史」の講義を担当する。18年には梅原末治らとともに京都府史蹟勝地調査会委員の囑託を受ける。1919年(西田34歳)1月13日の日記は、その報告書<sup>(15)</sup>に収録されることとなる紀伊郡納所村の「唐人雁木」に関連して、渡辺家所蔵史料が朝鮮通信使の応接役を務めた淀藩士渡辺蟻洲(善右衛門)自身の手になるものと判明したことを記す。これにより、宇治川旧路沿いに遺る「唐人雁木」と称される石階段の由来を明らかにし得たのであり、文献史料によって遺構

の来歴を裏付ける貴重な成果に繋がった。

1月末からは、「国民教化講座」や「史蹟踏査」の準備をしている様子が窺える（1919.1.28、2.22、3.1他）。これは、栗野秀穂の発案で1917年に発足した史学地理学同友会の企画になるものである。第一回目の講座は3月1日午後6時から寺町通四条下ル大雲院地内の高等家政女学校で開催され、西田や中村直勝、魚澄惣五郎、植村清之助ら若手研究者が講師を務めた（1919.3.1）<sup>(16)</sup>。その後も継続して開催している（1919.3.29、6.23）。「権威ある専門的研究が一般社会の知識の向上に資す」<sup>(17)</sup>ことを目指した史学者たちの活動の一環である。

私生活では、19年2月に大西祝（東京専門学校教授、哲学者）の長女道と結婚し、南禅寺北ノ坊町に新居を構える。新妻のこと、結婚のことに関しては淡々とした記述である。親しい友人にも事後報告であった。結婚前後の一灯園主宰者西田天香との交流（1919.2.11、2.18、3.8、10.5）は、一灯園と大西家とのつながりからであろうか。

6月に助教授に任じられるが、日記に関連する記載はない。翌月20日の恩師内田銀蔵の急逝に際しても特に記載はないが、『芸文』に寄せた追悼文で、過去の自分の日記（おそらく副手時代の）を読み返し「（内田から）訓戒をうけて涙こぼるゝばかりに」書き留めた箇所を見ては新たな涙を誘われた、と哀悼の念を記している<sup>(18)</sup>。

## 読書記録

折々に記される古典籍や文献の読書記録、寺院・旧家の調査記録なども興味深い事柄である。

1911年から12年にかけては、内田銀蔵より貸与され、以後の研究生活を方向付けた<sup>(19)</sup>コンドルセ *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain* を読み進めている。桑木巖翼の『哲学綱要』（1913.4.20）や「オックスフォードノ社会法制史」（1913.4.25）など、洋の東西を問わず最新の研究の確認も怠らない。“オックスフォー

ドの社会法制史”は、同大学教授の法制史家ポール・ヴィノグラドフが1908年より主宰した叢書 *Oxford studies in social and legal history* であろう。叢書全9巻のうち、この時までには3巻刊行されている。「ブッヘルノ原始人民ノ経済状態」（1919.9.8）は、Karl Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft*（1893）と思われる。本庄栄治郎の論文「ビュッヘルノ経済段階説に就いて」（『経済論叢』8-6、1919.6）に触発されて紐解いたのであろうか。

以上、簡単な解説を試みた。内容の詳細な分析については、残りの日記の翻刻とともに今後の課題としておきたい。

本稿は限定的な紹介にすぎないが、はじめに述べた西田個人史研究においても、また近代の史学者・知識人の有り様を問う上でも、資するところの大きい史料の一端を垣間見ることができよう。

※本稿は、2016～2018年度同志社大学人文科学研究第10研究および、2019～2021年度同第9研究「歴史学の成り立ちをめぐる基礎的研究—現場と公共性—」の成果の一部である。解説にあたり、同研究班のメンバーをはじめ多くの方々のお力添えをいただきました。誠にありがとうございました。史料閲覧をご快諾いただいた京都大学大学文書館には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

## 凡例

翻刻の基準は下記の通りである。

- ・日記帳に印字された「予記」欄および本文罫線から意図的にはみ出した記載については【 】で括った。「発信」「受信」欄の記載はそれぞれ【発信】【受信】とした。
- ・〔 〕内は翻刻者による註である。
- ・人物については、学会報告や肩書き等から判明



- した人名、および交友関係・前後の文脈から推測しうる人名を、原則として初出個所に補註した。
- ・旧字・異体字は正字に直した。固有名詞についてはこの限りでない。
- ・適宜句読点を付け、改行を詰めた。
- ・判読不明の文字は字数分を□で表し、字数が確定できない場合は〔 〕とした。
- ・アルファベットの不明文字は、大文字を\*、小文字を・とした。
- ・原文中の欠字は該当個所に〈 〉を記載した。
- ・抹消部分は文脈上必要なもののみ翻刻した。
- ・朱筆は冒頭と末尾に補註を付したが、短文は冒頭のみ補註し「 』で括った。

## 註

- (1) 競技かるた百年史編纂委員会『競技かるた百年史』2008、109頁。
- (2) 史学史上の西田史学の意義については早くから論じられるが、ここでは永原慶二『永原慶二著作選集』9吉川弘文館2008（初出は永原『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館2003）をあげておく。西田の生涯を通じた研究としては、柴田実「西田直二郎」（日本民俗文化大系10『西田直二郎・西村真次』講談社1978）がある。
- (3) 蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について―関西民俗学の黎明―」（『京都民俗』19、2001）、菊地暁「京大史の「民俗学」時代」（丸山宏他編『近代京都研究』思文閣2008）、入山洋子「『京都市史』編纂と歴史学」（小林丈広編著『京都における歴史学の誕生』ミネルヴァ書房2014）など。
- (4) 齊藤利彦「西田直二郎とヨーロッパ留学」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』5、2008）。
- (5) 宮地正人「天皇制ファシズムとそのイデオログたち」（『季刊科学と思想』76、1990.4）。
- (6) 長谷川亮一「『皇国史観』という問題―十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』白澤社2008、駒込武他編『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』東京大学出版会2011。
- (7) 前掲註（3）拙稿では、1948年まで続いた「京都市史」編纂事業への西田の関わりを略述した。
- (8) 西田直二郎「感想」（『読史会二十周年史』読史会1930）。
- (9) 江馬務「感想」（同上）。
- (10) 1909年12月達示。『京都大学百年史 資料編1』1999、331頁。
- (11) 『上田秋成全集 第一』国書刊行会1917、緒言。
- (12) 西田直二郎「兵範記に就いて」（『史林』1-3、1916.7）。
- (13) 西田直二郎『京都史蹟の研究』吉川弘文館1961、序2頁。
- (14) 前掲註（4）齊藤論文。
- (15) 京都府『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊1919。
- (16) 史学地理学同致会『歴史と地理』3-3、1919.3。
- (17) 「昨年の史学地理学界」西田執筆部分（『史林』3-1、1918.1）。
- (18) 西田直二郎「内田先生」（『芸文』10-10、1919.10）。
- (19) 西田直二郎『日本文化史序説』改造社1932、はしがき。

## 〔資料〕

明治四十四年当用日記（東京博文館発行）

一月一日 日曜

~~〔 〕年なり哉。~~

~~瑞雲のたなひくところに佳祥しきりに湧けり。~~

~~嗚呼過去一年を顧んか吾人は万丈の高みより千仞の巨谷に墜落せるの〔 〕七月〇〇六月、〔 〕。我半生の志望ハ惨々に破かれ血涙流れ〇〇〇さるもの也。彼の我ノ才の足らざる〔 〕。~~

一月二日 月曜

時の利あらさるか、過古三年孜々としてはけみ屹々として務むるもの、遂に何等の最後の奮戦に助く

るものなく平々凡々の裏に予は大学ヲ出てたる也。  
失望、落胆、之れ余か大学の生活の最末に得たる  
唯一のもの最大のものたり。

一月三日 火曜 ～ 一月十六日 月曜

[全体に×印]

一月十七日 火曜

[×印]

[bewerkstelligtカ]  
bewirkstelligt

一月十八日 水曜 ～ 二月一日 水曜

[全体に×印]

二月二日 木曜 [文字にかかる形で全体に×印]

午後。夜精神疲労甚しくして読書に堪へず。何と  
なしに憤しくなり悲観す。

二月三日 金曜 [全体に×印]

二月四日 土曜 [全体に斜線]

二月五日 日曜

過古は過去。

寒し。午後散歩シ頭痛気味あり。風邪。

二月六日 月曜

人行揚々坦途上、我在喘々峻道下。

下鳥羽大沢、古文書。

二月七日 火曜

戦へ戦へ。

失望と落胆ヲ以テ首途ノ第一歩に得たるものは幸  
福なり。

三月六日 月曜

雨。津田<sup>[和一]</sup>・清原<sup>[貞雄]</sup>君来。

三月七日 火曜

津田君柏原ニ行く談アリ。夜、津田君宅ニ行く。

三月九日 木曜

夜宿ニ居ル。

三月十日 金曜

夜津田君宅ニ行く。寺嶋君。

三月十一日 土曜

午後<sup>[勝郎]</sup>原先生を訪ふ。津田君のことにつきて也。

夜、清原君来る。集会所に行き山本信吉君と共に  
菓子を食べ、出て、清原君宿にて雑談。帰ルトキ  
火事アリ。読書セズ。

三月十二日 日曜

快晴。午前七時半起床。日曜にかく起きたるハ珍し。  
一時間半読書。

午後テニスヲナサントスルトキ津田君来<sup>[勝藏]</sup>ル。桑原  
教授のことにつきて心配する故、三時過桑原教授ヲ  
訪フ。津田君宅ニ行き、夕食を饗せられ、其後京  
極に行く。

(本日大阪ニ飛行機ノ会アリ)。

三月十三日 月曜

午後<sup>[文三郎]</sup>松本学長より大阪高商へ行カズヤト問ハル。  
夜松本教授を訪ヒ其話ヲ聞ク。九時前帰り。

読書。

久シク津田君ノコトニ関シテ読書ニ耽ル暇ナカリ  
キ。今ハヤーヤク落付カントス。

四月二十九日 土曜 晴 此頃寒ムシ

名<sup>[那珂次郎]</sup>越君に手紙ヲ出ス。夕転宿。モトノ慶運院ニ  
カヘル。茶話会ヲ開ク。津田君宿へ行き宮津中学  
に赴任ノコトヲ奨ム。清原君同行。

四月三十日 日曜 曇少雨 寒

史学研究会アリシモ行カズ。

フレデリック大王ニツキ（中村善太郎）

儒仏道葛藤研究資料（高瀬武次郎）

テニスヲナス。夜、奴婢ノ研究。高楠氏手控ヲ見ル。

五月一日 月曜

〔Alteカ〕 〔Mutterカ〕

Alt\* \* \*\*\*\*\*, \* \*\*\*\* geld\*,

五月二十八日 日曜

近来動揺して静平たる事を得ず。

六月二十九日 木曜

最も惨酷なるものは静平を奪へるもの也。

吾人は過古をあきらめん。過去は過去たれ。過去は最早思はず、吾人に只僅に静平なる現在を与へよ。未来は暗々たる濃霧深煙に掩はれて固より見るわかず。

六月三十日 金曜

六月卅日ヲ送る。

此日記帳ヲ買ひテヨリ本日にて已に半年なり。既往の日次ヲ顧ミテ其如何に蕪雜荒涼タルカヲ見る。精神の動揺は悲しき悲しき波の如くうちかへし〜して我頭脳を擾せり。此六月の日次ヲ顧ミテ其記事の存するものにして其の記事の内容を見よ。迫まれる生活と、之れに伴ふ<sup>□</sup>苦しき思想の哀愁の感<sup>□</sup>は吾人を弄ひて如何になさんとするか。吾人をしてせめて静に考ふる事を許さしめよ。吾人をしてミネルバ神の裡に眠る小児の如くあらしめよ。

七月二日 日曜

一、質素たれ、而も品格を墮す勿れ。礼義を乱るべからず。

一、確固たる信念を有し濫に迎合主義に走るべからず。常に自ら信ぜよ。

一、必しも成功せざるもよし、堂々としてやるべし。

七月九日 日曜

文明意義次稿ヲカク。夜遅くまでおき居たり。

寝<sup>〔にか〕</sup>□つきたるは午前の三時半なり。

七月十日 月曜

文明の意義の続稿書了、午前十時半。

八月一日 火曜

偶感

一、報酬は少なきを以て幸福とす。用事をさほどせざるもよろしき故也。吾人は従来あまりにやり過したる也。よき加減にすべし。グズ〜そのすじへ其の時云へ。去年は多少の事情の存するものあるか故にさほど勉強も出来ず、仕やうと思はず、故にどーてもよかりしも本年は小生も少しく勉学もしたし。故にさう〜少報酬にてハ用事も出来ませぬと断然云へ、気に入らなければよすばかり也。

八月二日 水曜

一、なるべく研究して発表すべし。今の内ならば少々まづくてもかまはず。又何かをやらうとするならば憂さもはれるべし。

一、書籍は雑誌以外のものは一切かはず、書物の入るやうな研究ハせざるもよし、と云ふ積りにてやるべし。書物など言ふものは贅沢に学問する奴の飾りなり。一種の室内装飾也。乃至悪く云へば不勉強家か勉強家らしく見せる武器也。なるべく書物は買はざるやうにすべし。

一、見識を有すべし。何かにつけて識見を有すべし。平凡にして何等識見のとるべきなき人間はだめ也。

八月三日 木曜

一、形式にとらはれざるやうすべし。教師に対し<sup>〔ママ〕</sup>てても然り。

九月一日 金曜

儉に安ぜよ。時期を待つべし。あせるべからず。  
人の成功に気を奪はるべからず。悲観ハ大になす  
べし。而も其間に一介の乱れざるものを有せざる  
〔ママ〕  
かべらず。

九月十一日 月曜

十一月 五 四 10

十月 三 七 12

九月 三 四 7

九月二十五日 月曜

大学教授たるべし。

大学教授たるべし。

然らずんば死すべし。

〔折カ〕  
百倒不撓。

他業に転ずべからず。

一步又一步進ムべし。

銀時計何モノゾ。

負くるな〜。

勉強すべし〜。

十月四日 木曜

朝、／

夕、コンドルセー。

本日ヨリ朝夕語学課定ヲラク。(1) 夕ハ就眠前  
一時間。(2) 七時半ヨリ三十分、但シ学校ニ於  
テ三十分。朝ナシ得サルトキハ夜課学前三十分。

十月六日 金曜

午後四時ヨリ大阪ニかへる。

十月七日 土曜

在阪。遠忌。

十月八日 日曜

在阪。

十月九日 月曜

在阪。

十月十日 火曜

午前九時出発、上洛、十一時半帰着。皇典講究所  
試験。

数日ノ帰宅ハ心神愉快トナリ、今後勉強出来ルヤ  
ウニ頭ガ清クナレリ。天気ヨク近来冷氣増シテ書  
ニ親シムベキ。

十月十一日 水曜

好節トナリタル故ナリ。

【買物 名刺、罫紙、不磨墨】

十月十二日 木曜

一時間、コンドルセー。

十月十三 金曜

〔重雄〕  
末廣博士ノ伊土戦争観〔『京都教育』233号、1911〕。夜、  
江記読了、宇多天皇御記読了。

【受信 清原君】

十月十四日 土曜

午前ハ満濟〔満濟准后日記〕。午後二時半ヨリ一条浄  
福寺マデユク。回顧料及少年会記念品ヲ持行ク。  
山塊記 六、コンドルセー 三十分。

十月十五日 日曜

午後、帝室博物館ニ行ク。東寺ニ行カントシタレ  
ドモ時間ナクテ止メタリ。

十月十七日 火曜

史蹟踏査会相談会、午後ヨリ開ク。六時頃まで相談。

〔元次郎〕〔秀穂〕  
川島・粟野二君常任幹事。

大学院も本学年を以て終りとす。



十月十八日 水曜

<sup>〔銀線〕</sup>内田教授ヨリ兵範記ノコト云ハル。夜、<sup>〔与市〕</sup>市村君来。礼ヲ持チ来ル、辞之。十一時半過ニ床。

十月十九日 木曜

京極散歩。本日ハ参講にて賑也。神道史原稿ヲ書ク。十二時臥床。

〔「京都駅発汽車時刻表」一枚挟み込み一省略〕

十一月六日 月曜

<sup>〔周行〕</sup>三浦先生預金

10. 95. 259

立かへ . 08. 三雲ヨリ水口マデ馬車賃  
 . 15. 五日昼食代 牧の氏立かへ  
1. 00 宿代  
 1. 23

決算 . 60 停車場マデ車代  
 1. 10 水口マデ汽車賃  
. 15 四日昼ベントー  
 1. 85

〔計算メモ一省略〕

十二月二十一日 木曜

本日学校帰ル時、内田先生より色々と問ハレタリ。先生ノ懇切ナル、涙コボル、バカリ也。懇切ナル言葉ニホダサレテ女々シキ言葉ヲ吐クベカラズ。男子須ラク堂々タルベシ。研究室ノ用事ノ多ナルコトヲ<sup>〔Klagen〕</sup>クラゲンスベカラズ。男の腸ヲ見ラル、ワザ也。先生モ用事多キコトヲ氣ツカレタルハ大ニヨシ。言フベクバ、なほうき事のつもれかし。我心をためさんト云フ主義ニテヤルベシ。用事ガアラバドン〜御言ヒ下サイ。自分ハ兎ニ角力カギリヤリマスガ、出来ナイトコロガアルナ

ラバ大ニ鞭撻シ下サイ。要スルニ世ノ中ハソー朝ヨリ吞〔22日に続く〕

十二月二十二日 金曜

〔21日より続き〕氣ニ学問ガ出来ルト云フトコロハ天下何処モナカルベシ。カクノ如キ苦シキ境遇ニ居テ先メテ学問ノ楽ヲ知り得ル也。吾等ハ実自分ノ為メト思ヒナガラ書ヲ贖ヒ思ヲ凝ス時間ナルモノハ、殆ンド数フルニ足ラサルバカリ也。而シ其レハ尚甘露ノ一滴万解の砂糖水ヨリモ甘美ナルト同シク、之レニ会ハバ凡テノ憂モ忘レハテ、天上ニ遊ビテ天の妙楽ヲ聴ク如シ。実ニ我ガ靈ノ往クミネルバノ宮居コソハコレ也。

一方、又予ハ年モ若クシテ成ルベク苦辛ヲ積ムルコト、楽ヲ尽クスニマシテ幸福也。閑ヲ得ルナラバ其レハ現今アルヨリモ多クノ勉強〔23日に続く〕

十二月二十三日 土曜

〔22日より続き〕是レニ伴ヒテ多少ノ成績ヲ上グルコトヲ得タルナルベシ。之れ確ニ快心ノ事業タリ。而シナガラ又顧ミテ例<sup>〔取〕</sup>令学問ハ幾分遅ル、ト雖、是の障リ多キ間ニヨク刻苦<sup>〔取〕</sup>乱レズヨク忍ビ悲ミテ紊レザル修養ヲ得ルナラバ、尚一層幸福ナラント存ズ。ノラ、人形ノ家ニアル言ヒブリデハナイガ。<sup>〔ママ〕</sup>人間曰曰人ノ妻トナル前ニ女ニナラネバナラス。否、学者ニナル前ニ先ヅ人ニナラネバナラスト思フ。

今後一層、之レヨリモ閑ヲ得ルナラバ此ノ精神其マ、ニ進ムナラバ大ニ事ヲナスコトガ出来ヤウ。尚一層モアン moan ノ場合ニハ之ノ連続トシテヨリ難艱ニ忍ブルコトガ出来ヤウ。

十二月二十四日 日曜

人生一面ニ於テハ悟ヲ有セナクテハナラス。一面ニハ攻撃的精神ヲ有セネバナラス。煩悶々々、古キ言ヒクサナレドモ煩悶ハ青年ガ有スル権利デアル。同時ニ又義務デアル。吾人ハ煩悶ヲ有シ大ニ

有ス。之レヲ有シツ、而モ糺乱セズ自ラ務メ自ラ  
慮ツテヨク人格の完成ヲ期セネバナラヌ。毅然タ  
ル人格の人ハ、之レヲ有スルコトナクシテハ遂ニ  
ナリ得ヌ。

十二月二十七日 水曜

午前中。

午後、午飯早々<sup>(耕作)</sup>浜田講師方ニ訪問。粟野方。菓子  
ヲ買フコト。

持ち帰ルモノ 歴史地理 第〈 〉、播磨鑑、播磨  
古城誌、社会学ノート、ランプレヒト英訳、神田  
本 太平記。

明治四十四年当用日記補遺

郵便貯金

記号番号 京ほ〇四六八九

受持貯金局名 大阪郵便貯金支局

四壺年十月廿九日

重曹 二四.  
(ゲンチアナ)  
ケンチヤラ末 五.  
(ジヤスターゼ)  
消化シヤスターゼ 三.  
(糖)  
番木別 〇.八  
一服 1/30

下り バスミット . 五

秘 マリヨンヤ ウスタ . 五

金銭出納録

万年筆 二.五〔2円50銭、以下同様〕

ラケット 二

蘭語 二.五

手帳

明治四十四年三月収支一覽表

支出

暗室ランプ等 75〔75銭、以下同様〕

水洗皿 25

印画枠 25

印形 12

万年筆

ラ

明治四十四年十二月収支一覽表

収入

20 20〔20円、以下同様〕

20 20

14 14

2.5

〔朱筆〕〔5〕

565

〔朱筆〕〔5〕

〔朱筆〕〔615〕

支出

靴 5〔5円、以下同様〕

外套 30

返済 5

〔以下朱筆〕

書物 5.5

宿 6.0

食 8.5

〔以上朱筆〕

住所人名録

福井県遠敷郡口名田尋・高小学校 坂井慶三

上島羽字出在家 吉村洪一

伊セ山田市一志久保町

第七尋常小学校西側新屋敷内 清原貞雄

北海道小樽区堺町畑五 端良一方 寺田貞次

新町頭字岩栖院町 後藤方 大山友一

明治四十五年当用日記（東京博文館発行）

〔見返し〕

Es entfaltet !!!

N.Nishida 1912!

Es Entfalt

Es Entfalt

entfalt!

滞り腐れる水はみるもうし

流れへてきよき水よし

一月一日 月曜

明治四十五年は来れり。予は二十七歳となれり。本年は吾人に何をもち来らんとするか。此日記三百六十幾頁の最後の頁は吾人は如何なる感想を以て筆を下すか。是の一年、是の一年は吾人の生涯に於て忘るへからざる一年となるべしと信ず。吾人は今や二十有七の歳を迎へたるなり。是の一年にして為すなくして終るならば吾人寧ろ愧死すべし。

一月十三日 土曜

風寒くして天晴れたり。今日午後六時家を出て、京洛に向ふ。京坂電車も無為にして京都につけば寒風凜烈時々白雪を交へたり。而も何となく愉快にして五条橋より北に行く小さき電車の一隅に身をよせれば元気心の奥に湧き出て本年は努力すべし、必ず何物かをもち来さざるべからずと思へば身も軽らかにして今出川より電車を下りて宿に着く。

堺君・木村君と菓子を食べひて暫く話す。

【受信 年賀状来レルモノアリ（京都）。清原君・岩井武俊君・中村健一郎先生〔第八高等学校教授・元三高教授〕】

一月十四日 日曜

勝手かわりし故か室の暗かりし故か九時過に眼をさます。仕方なればとて床の中にて時を待つ。

十一時より湯に行く。小松君と共に。

昼食後小松君の室にて山本信吉君と共に話す。西依理学士来る。後理科助手来る。辞して我が室に帰り四時十分日尚あれば坂口先生を訪問せんとす。先め聖護院裏手の家を訪ひしも転宅につき新榎木町丸太町下るところを訪ふ。先生は普請の大工の管督をしてゐらる。日くれ六時過頃まで話す。家にかへり室を片附く。

一月十五日 月曜

学校に行く。本日河合弘民先生、朝鮮經濟史講義始ル。社会学ノ講義ヲキク。

一月十六日 火曜 良 雪アリ

大阪大火。号外切りなり。第三号外に生玉神社焼け、火は東北ニ走り又地藏坂方面ニ向ふと云ふ。兵士ヲ派して上本町東部を警戒し、火は熄まずと云ふを見、稍心配しだす。時事新報夕刊を買はんとして雪ふる中を京極マデ行ク。夕刊売ルモノナシ。三条ニ回り朝日ノ号外ヲ見、火鎮ルヲ見テ安堵。かへり来り、文学史ノ原稿ヲツクル。十二時過臥床。

一月十七日 水曜

昨日大火焼失家屋五千三百と号ス。

本日文学史講義アルベキノトコロ電話ニテ休ンテクレト云フテキタ。

夜、小松君と共に湯屋ノカヘリニ津田君の宿ニ行ク。十一時マデ話ス。谷本教授が岡山孤児院ノ慈善演劇ノ入場券ヲ十枚ハカリ封入シテ各教授ニ送ツタ。其仕ウチヲ屑トセヌトテ大築千里教授ハ使ヲ以テ之レヲ返サシム。大幸教授ハ紙屑籠ニ捨テ込ム。久原学長ハ書留郵便ヲ以テ送カヘス。中沢高工校長ハ三錢印紙封入シテ表記ニハ印紙ヲハラヌ罰金ヲ出サスヤウニシテ先方ニ発送ス。四者ノ各性格ヲ表ハスカ。

東大鶴田賢次教授免職理由等ヲモシロシ。鶴田教授ハ「三四郎」の中ニアルニノ宮先生也ト云フ。

一月十八日 木曜

皇典講究所始業式。<sup>〔真浦〕</sup>大貫宮司ノ古事記酒宴<sup>ホカヒ</sup>ノ項ノ評釈アリ。武内宿祢ヲ日本三大忠臣(楠公、清麿、平重盛)ニ加ヘテ四忠臣ト云ハントス。三浦博士君臣一徳ト云フ話アリ。各国ハ皆ト<sup>〔tribe〕</sup>ライブガ併合シテ大トナル。我国天孫人民ハ他ノモノヲ同化シタ、外国ニハ革命等アリ、我国ニハナシ。夜、<sup>〔秀雄〕</sup>荻山君来リ。十時過マデ話ス。

一月十九日 金曜

午後皇典<sup>〔ママ〕</sup>研究所、神道。鎌倉時代、時代概況。平氏滅亡。源氏。頼朝ノ勤儉尚武。京都ノ荒廢、学校、学者、関東ニ行ク。承久ノ乱。関東、京都風ヲ入レ驕ルー貞永式目中ノ敬神思想。夜、山槐記ヲ読ム。卷七ヲ終リ卷八ニ及ブ。

一月二十日 土曜

午前九時前廿分起。学校、満濟。午後二時前カヘリ掃除。三時前頃ヨリ内田教授方ヘ借用書ヲ返却ニ行カントシタルニ、其書中ヘンにアムラインアリテ其レガ読ミタクナリ之レヲ読ム。「各時代及各人種の迷信」と云ふヲ読ム。夜同様。十二時過臥。精。

【学校ニテ一時間山槐記ヨムーナサズ。  
午後カヘリ三時迄コントロールセー読ム。  
三時内田教授訪問、書セキ返スーナサズ】  
【受信 名越君火事見舞。津田君借家断】

一月二十一日 日曜

午前八時半前起。少シ頭痛ム気味アリ。国民雑誌来ル。平清盛論ヲヨム。午后山槐記、夜同前。本日頭痛ノ気味モ覚シタルニ、十時過ヨリ又感ズ。少シ疲労ノ気味アレバ早く臥床、十時半。  
【発信 名越君御礼】

一月二十二日 月曜

<sup>〔Schirm〕</sup>シェルト久シク紛失シタリシガ地理学研究室ニテ<sup>〔文太郎〕</sup>足立医科大学教授ノ借用セラレタルコトヲ知ル。夜、慶運院ノ会ヲナス。是レ<sup>〔収蔵〕</sup>富永君〔理工科大学〕ガ神戸ヨリ帰リ来リシ故也。十時半終。室内掃除。眼鏡修繕。十二時過臥。今日帰宅後ハ読書セス。梅原末治君、川島君ノ紹介ヲ持ち来ル。予六時マデ朝鮮史ヲキキテイタ為メ会ハズ。

一月二十三日 火曜

七時起。七時五分梅原君来ル。歴史地理学会ニテ講演ヲシテクレト頼ム。播州行ナドアリ、且会ナド近日アルコト故忙シケレバ、来月ニ~~延~~シテハ講演ヲセント云フテ帰ラス。七時半帰ル。保元ノ乱ノ地理デモ話サン。地理研究室ニテ<sup>〔貞次〕</sup>寺田君ニ会ヒ、梅原君ガ本日学校帰りニ君ノ家ニ行クト云フコトヲ云フテイタト云フタ。而シテ講演ヲシテヤツテ下サルヤウニ頼ム。寺田君ハ中バ承諾シソウナ様子テアツタ。先生ナドモ聞クノカトタツネテイタ。気懸リト見ヘル。寺田君ハ二十五日午前出宿ト云フ。  
【朝鮮史聴ク】

一月二十四日 水曜

皇典講究所ヘ文学史ヲ教ユ。

一月二十五日 木曜

本日何トナク悲シクナル。九時前<sup>〔ママ〕</sup>臥床、学校ニテ神道史ノ原稿ヲツクル。思フヤウニ行ケズ。カヘリテ夜在宅。児嶋誌上巻ヲ読ム。明日ノ神道史ノ原稿ヲツクラスニ寐ル。不快甚シ。故二十時半臥床。明日早起シテ愉快ナル気分ヲ得ント思フ。

一月二十六日 金曜

七時めざましを聞き八時十五分前ニ起ク。宿ヲ出スルハ矢張八時廿分程過也。学校ニテ神道史原稿ヲツクル。講究所ハ一時三十分ニ行ク。宿ヲ出スルトキハ一時十分前ナリ。厠ニユキナトシタル為

メ後レタルニテ今日以後モー少シ早く行カント欲ス。二時間ノ授業ニ随分ツカル、コト也。

三浦教授宅ニテ読史会。

浜田講師ヨリ谷本教授宅ニ行カレタシト云ヒ来ル。

【受信 家ヨリ清華院□山ニツキ】

【<sup>（貞吉）</sup>喜田先生今日十二時前研究室ニ来ラル】

一月二十七日 土曜

【傘、靴下、手フクロ、地図、奉書】

二月八日 木曜

〔以下朱筆〕本日東寺行ク。百合文書い号ノ文書ヲ見ル。其他未整理ノモノ多ク見ル。

かヘリテ皇典講究所ノ原稿ヲカカントスレドモ百想乱レ来リテ筆トルニモノウシ。要スルニ本年度ヲ以テ是非此<sup>〔議か〕</sup>職<sup>〔ママ〕</sup>ヲヤメントス。。〔以上朱筆〕

二月十日 土曜

十一時ヨリ芸文編輯会。

午後東寺ニ行ク。<sup>〔牧野信之助〕</sup>牧の君と共に。

午後五時ヨリ<sup>〔天王寺中学校〕</sup>天中<sup>〔券太郎〕</sup>会。鈴木新校長ハ<sup>〔虎次郎〕</sup>内藤先生と旧友ノ由ニテ、内藤先生ヨリ余ノ話ヲ聞キタル由、話シセラル。

二月十一日 日曜

けいうんゐんノ人々ト石山ニ行ク。写真ヲトル。天気晴れて風も温かにして春の心地す。九時過に宿を出てたる事とて遅かりし故、石山につきたる時は一時半なりき。鯉汁に舌ツ、ミうちて二杯を吸ふ。八時かへる。

二月十三日 火曜

試験ス。

二月十四日 水曜

一時過マデ勉強ス。高德ノコト。之レハ明後日読史会上ニテ播州ニ旅行シタル報告ヲナス為メ也。

栗野君ガ神社ト古墳及び総論。余ハ高德及地理、結論。

コンドルセー序論ヲ読了。

二月二十二日 木曜

午後ヨリ勸修寺家ニユク。

夜二時マデ起キ、ランプレヒトノ近世史学〔Karl Lamprecht, *Moderne Geschichtswissenschaft*〕ヲ読ム。

【発信 勸修寺行】

【受信 名越君】

二月二十三日 金曜

午後五時帰り何ダカ草臥レテイルヤウテアルカラ床ヲノベテ仮寐ス。僅ノ間マドロムニ心地キハメテ良シ。十一時マデ勉強。明日ヨリ早く起キン為メニ早く寐ンコトヲ定ム。是れ本日昨夜ハ遅キ寐ネ、明本日遅く起キタルニ心地ハナハダ悪シカリシヲ以テ也。今夜ハ心地ヨク寐ルニ惜シケレド寐ネツ。

【受信 松本茂平君本催促。清原貞雄君転宅】

二月二十四日 土曜

午前八時ヨリ三浦先生宅ニ行キ、伴ニ随ヒテ勸修寺家ニ行ク。

二月二十六日 月曜

午前九時牧野君と共に勸修寺へ行ク。

三月一日 金曜

大学ノ記念日也。陳列。

三月二日 土曜

学校ヲ休ミテ勉強ス。此ノ日山槐記ヲ大ニ読ム。

三月三日 日曜

午前ヨリ勉強。山槐記ヲ読ム。両日ニシテ四五六冊モ読ミタルニヨリ大ニ勢ツキテ読ミ出ス。



三月十日 日曜

【◎】

平安朝時代。絵画ヲ見ニ行ク。

【絵画。博物館】

三月十一日 月曜

<sup>〔清一〕</sup>滝先生ノ絵画史ニ出ル。月、火、木ノ夜六—八。

三月十二日 火曜

皇典講究所ニテ試験。神道史 一時間。

徳川時代ニ於ケル神道ノ諸派

平安朝ニ崇敬セラレタル神社ノ重ナルモノニツ  
キ簡單ニノベヨ

滝先生絵画史ニ出ル。

神道史、夜成績調査ス。

三月十三日 水曜

鳥兎<sup>〔効〕</sup>早々、三月已ニ二十三日ナリ。以前日記カクコトヲ怠ル。但シ勉強ハ大ニナシタリ。近来夜間ハ殆ンド勉強ス。

二年 一、諸院時代ニ於ケル勅撰集ト其歌風

二、方丈記、平家物語

文学史試験

一年 竹取物語

一、僧正遍照、紀長谷雄、小野篁

三月十四日 木曜

図表研究ノ時来ルモノ纔カニ一名ナリ<sup>〔四郎〕</sup>(山下君)。牧野君研究室ニアリケレバ牧野君モ行クコトトナル。牧野君ハ本日ノ時間ハ休ム考ナリシナリ。

予、地理研究室ニ行キテ内田寛一君ヲ誘ヒテ図表研究ニ出ルヤウニスル。中野君トシバシ研究室ニテ話ヲス。後、三浦教授ノ室ニテ満濟准后ヲ校訂シツ、アルトキ、内田教授ハ学生ニ向ヒテ出席者少キコトヲ以テ若シカクノ如クンバ図表研究ヲ止メント云ハレテイルノガ聞ヘテイル。

三月十五日 金曜

昨本夕ヨリ、朝起会ニ加入ス。之ノ会ハ午前七時マデニ起クルヲ目的トシ、若シ過ゴサバ過料金五錢ヲ出ス規定ナリ。但シ予ト富永君ハ朝寐坊ナル故、特ニ標準ヲ寛クシテ午前八時トス。此会ニ入りタルコト故、遅レテハ恥カント思ヒシカバ、本日ハ本日午後ハ十二時ニ寐ネタレドモ翌日ハ午前六時半頃ニ目ヲ覚ス。又眠ニ落チテ七時半目ヲサマシ起ク。

三月十六日 土曜

本夕、慶運院ニテ牛肉会ヲ催ス。堺君・磁野君幹事ナリ。今北君・松山君来ラル。腹膨レテ本夜ハ安眠ヲ妨ゲラレ時々目ヲサマス。

三月十七日 日曜

午前七時半起。九時前家ヲ出テ雨ヲ冒シテ(但シ出ル時ハ止ミテアリ)博物館ニ行キ、滝講師ノ説明ヲ聞ク。豊国神社ノ前ニ於テ下駄ノ花緒ヲ切ル。帰路<sup>〔友一〕</sup>大山君及同君ノ友達ト三人ニテカヘリ来ル道ニテ直シ屋ニ鼻緒ヲ直サシム。津田君宅ニヨリ、又荻山君宿ニ行ク。荻君留守、雨ニ濡レツ、帰り来ル。

夜、山塊一冊(但半冊)、勸修寺、採点。

五月十三日 月曜

長 五尺五〇

量 一三貫八〇〇

胸囲

常時 <sup>〔尺〕</sup>二、五四

差 、二四

眼 15/F (-3.5 6/6)

1/F (-4.5 6/6)

五月二十五日 土曜

大阪ニカヘル。平野郷ニ行ク為メ也。

五月二十六日 日曜

平野郷ニ行ク。末吉家蔵古文書ヲ見ルタメ也。川島、  
牧の、栗の、<sup>〔道輔〕</sup>福惠、<sup>〔元健〕</sup>米沢、<sup>〔司氏〕</sup>座田、山下君。  
<sup>〔阪〕</sup>京坂電車にて帰洛。

五月二十八日 火曜

頭ノ加減悪ノ多シ事。  
暮し行くモノトナスの日送る。  
はかなし。

六月三十日 日曜

文明史ノ方法論ノ組立、已ニ一月ニ垂ントス。

九月十日 火曜

報告書キ初む。

九月十二日 木曜

【受信 樋口津弥太郎君ヨリ拙宅訪問尋合】

九月十三日 金曜

御大葬日也。学校に行かず。午後八時、百万遍ヲ  
初め諸寺の鐘なる。遠く伏見師団に弔砲の音響く。  
慶運院一同庭前に出て、奉弔ス。十一時より大学  
運動場に於て奉弔式あり。大学制服を着て行く。  
服ハ小松君のものを借る。

【発信 樋口君返書】

【受信 大阪高等商業ヨリ手紙、時間割ノコト。  
家ヨリ葉書一、右回送ノコト】

十月四日 金曜

読史会読物ハ、満濟准后日記及森山孝盛日記米屋  
騒動ノ条（天明七年）。  
夜読史会新入歓迎会アリ。十時終て電車ニテ家ニ  
帰ル。十二時着。

十月五日 土曜

史学会ノ歓迎会アリ、行カズ。

十月六日 日曜

本日母の桃山陵を参拜に行くにつき之れに伴ふ。  
七時半家を出てたるに天満橋にて四時間許立<sup>〔ママ〕</sup>つ  
なから待ちたるに驚きたる。橋の詰より南一町島  
町の通りまでつゞけるなれば其人数の多き知るべ  
きなり。十二時十五分前乗車。一時着桃。附近の  
料亭にて食事して山にのほり山道にて一度休憩し  
て后、御香宮に参して京坂停留場に来るも人多く  
して乗る能はず。京まで来りて後之に乗りて家  
にかへす。

十月十一日 金曜

報告第一回ノ上提出ス。午後三浦先生ニ研究室ニ  
テ会フトコロ、報告ハ見タリ、サレドモ之レハ史  
学研究ノ法見タヤウナモノ也。国史ト云フハ如何  
ト思フ故、記録ノ研究ヲ出スベシト也。  
本日読史会ニテ三浦先生ノ藤房遺跡ノ研究アルベ  
キノトコロ延引。

十月十五日 火曜

六条邦綱ノ一生。平家ノ文芸保護。六条邦綱と平  
信範。

十月十六日 水曜

王朝末ノ京中ノ不安。

十一月

王朝末之京都、十一月末マデ  
大仏鑄造之鍛冶、其後十五日間  
兵範記ノ研究  
良忍ト当時ノ文化  
京阪ノ心学

十一月三日 日曜

独逸ノ日本協会雑誌ノコト。図書館・研究室。

十一月五日 火曜

天中会ノ茶話会。

百練抄ヲ讀ム。一時過寐。

十一月六日 水曜

天皇皇后両陛下桃山陵御参拝。本日奉送奉迎ニ行カズ。

本日和田英松氏来ラル。研究室。兵範記見セタル様ナリ。余、皇典ニ行キテ留守也。<sup>〔謙蔵〕</sup>富岡先生ノ内ニ一寸ヨル。来客ノヤウナレバヤメル。本日時間割ヲ毎週水曜ヲ金曜ニ改メルコトヲ頼ミ置く。

夜、兵範記ノコトを調<sup>〔ママ〕</sup>ブ。夕一時間散歩。十二時寐。

【発信 岩橋】

十一月七日 木曜

二条新町ノ柴田寅三郎氏ヲ訪問ス。心学ニツキテノ事ヲ聞カン為メ也。

本日三浦教授ヨリ読史会大会ノ準備方法等ノ話アリ。川島君モ其談話中アリ。柴田家ヲ尋ヌルコト。新若竹町ノ新平<sup>〔民〕</sup>氏研究ノコト。京都ニ関係シテ国史ニ関係スルモノト演題ノ範囲ヲ定ムルコト。其後十六・十七日ノ読史会ノ旅行ニツキテノ相談アリ。住吉行トスルコト。十時ヨリ宿スルコト。

十一月八日 金曜

午後、後藤祐乗ノ子孫ナル後藤丈太郎氏ヲ三浦先生ト共ニ訪ヒタリ。祐乗ノ彫物、五十両及百両大判ノ雛形<sup>〔ママ〕</sup>。且元書状、前田利光書状等。庭ハ殊に見事ナリ。

大山氏ヨリノ林檎ヲ携ヘテ帰ル。

夜、今日後藤家ニ行クトキ鼻血出テ帰りタルトキモ少許出ル故ニ夜ハ静安ニスル為メ雑談ナドス。夜早ク臥床。

【受信 大山君、後藤邸ニテ】

十一月九日 土曜

【夜、清原君ノ宿ニ行キ荻山、栗野、二君会ス。十二時マデ話ス】

八時起床、九時登校。

製本屋ニ\* \*\*\*\*0x/Do\*\*\*\*-me/Hoffmannを遣る。Hoffmannノ表題ヲカリニSerrurier en Hoffmannトシタリ。内田先生ノ考ナリ。

十一時ヨリ芸文編輯会アリ。<sup>〔琢治〕</sup>小川、<sup>〔康算〕</sup>深田、<sup>〔乙男〕</sup>藤井諸先生及<sup>〔寿蔵〕</sup>植田君也。小川先生曰ク、芸文ノ表紙画毎年改ムルコトヲ止メテハ如何ト。之レ経費上ノコトモアルガ、又其表紙ニ内容・目録ヲ記シ得ル便アリ、之レ大ニ芸文ノ店頭ニアルトキ買フ人ガ之レヲ見ルニ便ナラント<sup>〔ママ〕</sup>】。

二時マデテニスヲナス。研究室ニ行キ勉強、基熙公記ヲ讀ム。

【発信 江馬君<sup>〔務〕</sup>ノ読史会ノ演題ニツキ、其ノ範囲ヲ京都ニ関係スルコトニシテ一般国史ニカンケイアルモノトスルコト】

【受信 日名静一君、芥田家目録】

十一月十日 日曜 曇後晴

九時眼さむ。午前中百練抄ヲ讀ム。午後直チニ富岡先生ノ宅ニ行ク。岩橋君ヨリ頼みノコトヲ願ハン為メナリ。且ツハ心学ノ家ノコトヲ尋ネン為也。門ヲ入ルニ玄関ニ「本日謝客」と記セル木札ノ下カレルニハ吃驚シタリ。案内ヲ乞ハンカト思ヒテ猶予してアリシガ、其中何ダカ面白クナクナリ其儘<sup>〔門カ〕</sup>ニモドリ門ヲ閉ゲテ外ニ出ヅ。他ニ行ク心地モセズ家ニカヘル。兵範記研究ノ筆ヲトル。五時ヨリ少許時間テニスス。晩食食堂連ト共ニ牛肉ヲ喰フ。後芸文ヲ讀ミ、和蘭文典、兵範記研究ヲ少シ書ク。十二時臥床。

【受信 予定<sup>〔ママ〕</sup> 河島君・岩田君<sup>〔覺蔵〕</sup>ニ旅行ノコトヲ通知スルコト。富長<sup>〔水〕</sup>収蔵君ヨリ平信、十五六日カヘル云々】

十一月十一日 月曜

【予定、三浦先生ニ芸文ノ原稿ノコト、読史会ノ

報告ノコト。】

午前八時離床。八時四十分学校に行く。本日、満濟准后ノ対読ナリ。之ノ用意をナス内、歴史地理学会幹事蘆田伊人君、岩井武俊君と共ニ来ル。下阪家文書等ノ話アリ。三浦先生来ラル。後蘆田氏帰ル。

満濟准后日記対読。午後、武教講録、武教小学ヲ探ス。内田先生ノ命也。武教全書ヲ図書館ニテ借ル。武教小学ノ板本を求むれどもあらず。

本日、芥田家の文書ノコトニツキ三浦先生ニ手紙来リ。之レニツキテノ談話ヲ三浦先生トナス。買入並ニ借入ノコト、買入ノ値段ヲ小生ヨリ芥田氏ニ私信ニテ交渉スルコト。

【発信 岩田覚蔵君、読史会旅行ニツキ其方ニ行くコト】

十一月十二日 火曜

午前九時離床。午前中午後ノ予習。午後皇典講究所ニ行く。天満宮と延喜式ノコトヲ云フ。タイプライター、西洋新着書ヲ押ス。Full Recognition [Robert P. Porter, *The full recognition of Japan*, 1911] 等。

夜、錦田君ヲ訪問ス。九時カヘル。友枝氏〔照雄〕ヘ謡曲ヲ習フコトヲ談シス。カヘリテ扶桑略記少シ読ム。芥田ノ案文ヲツクル。

【芥田書状案文ノコト】

十一月十三日 水曜

午前九時離床。此頃起ルコト遅ル。暁夢ニ土中より古瓦、古磚、古文書等ヲ掘り出シタルヲ拾ヒタル夢ヲ見ル。

芥田案文ヲ見セル。修正等アリ。満濟准后ヲヤル。夜兵範記研究ヲ少シ書ク。

墓番ノ家ヨリ貫ヒ来リタル小犬泣クコト頗ニシテ親犬モ来リテ不思議ナル声ヲ出シテナク。堺君、西村君、芦野君出テ、サハク。河原氏起キ来リテ犬ヲ放り出ス。堺氏ト喧嘩ス。

十二時過、一時近ク臥床。

十一月十四日 木曜

芥田五郎氏ニ手紙ヲ書ク。

喜田先生ヲ図書館ニ案内ス。

午後、後藤丈太郎氏方ニ行く。三浦先生と共也。本日ハ第二回目也。古文書、器物等ヲ見ル。判金に關スルモノ多く其他前田家との交通文書、家康より拝領の頭巾・茶碗等見る。本日ハ丈太郎氏在宅にて色々便宜ナリ。七時過帰宅。

夜心学に關するものを読む。心学史要。

【発信 芥田五郎。磯の實惠】

【受信 哲学雑誌来ル。岩田覚蔵君より堺旅行ノコト】

十一月十五日 金曜

明日ハ旅行ナリ。本日ハ忙シク、午前マヅ学校に行きて昨日後藤家にて借入れる約束シタル古文書ノ目録を調整す。正午出来、食事ナス。直チニ車に乗りて後藤に向ふ。借り入れて皇典講究所に講義をなし又車を備ふてかへる。

写真機ノ借入、レンズ甚た異りてありて面倒。

かへり食事して直ちに大阪に向ふ用意をして写真機及明日ノ持ち行く荷物など（堺大鑑、図、種板〔重〕）をもたけれど之れを持ちて三浦先生宅に行く。レンズヲ借らん為め也。之れより栗野君方に行き写真機〔ママ〕を持ちてもらうふ事とし、且和泉名勝図絵を借り、其れより浅沼商会ニ行き種板及空気を買ヒ九時半乗車、十一時半帰る。

【発信 磯ノ君へ、旅行ノコト報知】

【受信 清原君、為替十五円送り来ル】

十一月十六日 土曜

午前八時半高商に行く。奈良朝ノ美術工芸ノ事を教へ平安遷都ノ事に及ぶ。

其れより梅田に向ふ。十二時五分に一行ノ着するを待つためなり。未だ十五分はかりありければ附近ノ鮓屋にて鮓を食ふ。一行と共に電車にて南海

の停留場まで行き住吉に行き神社に行く。岩田君に逢ふ。後山下君来る。文書を多く見る。神代記古し。<sup>(信未)</sup>折口君の来れるに逢ふ。堺市役所に行き已に日暮れたり。七時頃まで居、大浜まで電車、茅海楼に宿す。

【発信 内田先生。清原君】

十一月十七日 日曜

大浜を十時前出発、岸和田に行く。郡役所に行きたれとも昨日考へし如く大阪府庁より達しは泉南に行かず泉北役所に行きたる事とて、郡役所にてハ不得要領ノ事多し。古文書のことはだめにて城を見物する。後久米田寺に向ふ。道にて蜜柑を買ふ。久米田寺に着し古文書を見る。附近に橘諸兄公及光明皇后の墓あり。此辺古墳多くして中には大なるものもあり。周囲池を回らす円墳式のもの、又ハ前方後円式ノもの如きもあり。雨の為め山様甚だ破毀して土露れたり。埴輪の見ゆるものあり。岸和田より乗車、直ちに大阪に向ふ。晩食、駅前にて。汽車中相談笑して帰る。米沢君ハ其中心なり。美人ありて米沢氏と背を合せて坐するものあり。米沢氏を皆ひやかす。三浦・喜田先生等のひやかしに大に笑ふ。米沢氏ハ一行の会計をひきかまへてして大に功ありし也。

【受信 東京・京都文科大学出身懇親会ノ案内状】

十一月十八日 月曜

九時半学校に行く。写真機を持ち行く。社会学講義聴く。三浦先生読史会大会の事につきうち合す。夜ハ心学史要を読む。十二時半臥床。雨ふり出でぬ。

【受信 案内状返事】

十一月十九日 火曜

皇典講究所ニ行く。

十一月二十日 水曜

満濟准后ヲヤル。午後少シテニスス。読史会大会

ノコトニツキテ三浦先生ト談ス。心学ノ書ヲ読ム。

十一月二十一日 木曜

兵範記研究ヲカク(午前)。午後ハ常德寺ノコトナド調ベル。日名君来ル。石田梅巖ノ心学ノコトヲ考フ。心学ノコトモ面白クナシト思フ。十時半頃ヨリ寒クナリ読書懶ク、何トナク面白クナシ。

【発信 牧の、清原君、読史会大会ノコト】

十一月二十二日 金曜

本日愉快。八時起ク。午前中神祇志料・本朝文粹ヲ読ム。午後皇典、其ヲ了りて紫竹の常德寺に行く。後藤氏ノ木像ヲ見ニ行ク為也。住職不在にて尼僧出デ位牌棚ニアル厨子ニツヲ開キ見ルニ木像各一軀ツ、アリ。一方ハ奴ノ鷹ヲ持テルアリ。一方ノハ財布ヲ前ニヲク。五時半カヘル。

夜談話。後、心学史要ヲ読了。十二時寝。

【受信 名越君、桜島登攀ノコト】

十一月二十三日 土曜

九時起。富永氏帰り来り談話。十時半より読書心学ノ講演ノコトヲ考フ。大体ノ筋道ヲ立テントス。午後テニスヲナス。真如堂辺の中学生・三高生と共にマッチをなす。慶運院ノモノハ皆負ケタリ。夜、湯ニ行キ葉書ヲカキ、後富永君ノトコロニテ談話。十一時半ヨリ読書。大日本史醍醐天皇紀ヲ読ム。一時臥。

【発信 三浦先生、昨日の状況】

【予 三浦教授宛手紙。柴田氏ニ交渉ス。次デニ写真やニモ】

〔挟み込み紙片①〕

一、時日

二、会場

第九教室。座田君届ケルコト

教官室ヲ借ルコト。一座田君受持 会議室。

三、食堂。心理教室



四、陳列—先生ニ任ス。西田

五、食事。吾妻や

十七人分 西、江、大、清、磯の、川、栗、山、  
平、市、福、座、米、中、後三人  
牧

○費用

一円。八十銭。

8 80

[挟み込み紙片②]

七、演題。

在學生 必ズヤル。

在外生 意志ニ任ス。

時間二十五分。五分ノ猶予ヲ与ヘル。

九人分

五時—六時 夕食

六時ヨリ十時。

<sup>[ママ]</sup>華岡君、<sup>[ママ]</sup>牧の、岩田。大山、磯の  
内藤先生、喜田先生、江馬君

役員

会場 主任 座田

食堂 主任 福恵君

記録。 <sup>[直勝]</sup>中村君

[挟み込み紙片③]

○陳列掛 座田 福沢

○会計 米沢君

○演題 時間配当。二十分

○交渉 栗野

在外

十一月二十四日 日曜

午前、中右記読ム。午後、二時半マデテニス。其  
レヨリ読書。

十一月二十五日 月曜

午前。

午後紫竹常德寺ニ行ク。写真三枚トル。カヘレバ  
慶運院ミーチング、遅レタリ。大日本史ヲ読ム。  
二時臥床。

十一月二十六日 火曜

午前。

午後皇典。かへり集会所にて読史会委員ノ会合。  
六時了。

六時ヨリ <sup>研究室ニ行キ</sup>直チニ学校ニテ満済准后日記ノ原本ヲ蔵  
ニ収メニ行ク。夜クラシ。其ヨリ急キ柴田ニ行ク。  
出ントスルトキ錦田君来ル。都合悪シケレバ友枝  
君トコニ行ケズ。柴田ニ行ケバ主人旅行ヨリカヘ  
ラズーカヘリ来ル。

中右記三十一冊四ヲ読ム。一時臥床。

十一月二十七日 水曜

午前後藤文書ヲ見ル。午後三浦・内田両先生及川  
島君角倉ニ行ク。予図書館ニテ心学ノ書ヲ借リル。  
夜柴田ニ行ク。鳩翁及梅巖ノ遺品ヲ見ル。

三浦先生宅ニ行キ読史会大会ノコトノ広告苦ノコ  
ト相談。十二時帰ル。

近来多忙、読書研究ハ常ニ二十時ヨリ始ムル有様也。

【発信 清原。大阪高商土曜休 <sup>[ママ]</sup>曜ノコト】

【柴田電話】

十一月二十八日 木曜

午後五時半マデ読史会大会ノ広告ヲカク。

十一月二十九日 金曜

午前プログラムノ張紙ヲカク。陳列ノ下調。夜京  
都心学ノ原稿ヲカク。

十一月三十日 土曜

読史会大会ナリ。本日ハ大商ニ行日ナレトモ休ム。

午前十時ヨリ陳列。午後〇時半開会ノ予定ノトコロ、  
一時ヨリ初ム。清原君来ル。岩田君モ来ル。

五時半、江馬君ノ中世ノ京都髪風マデ。

晚餐。

七時夜ノ部開会。

京都心学、予  
京間田舎間、<sup>〔ママ〕</sup>（喜田  
角倉了以、<sup>〔ママ〕</sup>（内田  
此間陳列品ノ観覧  
桓武天皇、三浦

十二月一日 日曜

午前九時半<sup>〔ママ〕</sup> 臥。文展見ニ行く。清原・粟の君共也。  
清原君ヲ停車場ニ送ル。カヘリ三時ヨリ<sup>〔秘藏〕</sup>辰馬君と  
共ニ史学研究会ニ行く、集会所也。<sup>〔神輔〕</sup>藤代先生ノ独  
訳忠臣蔵アリ。夜寺町ニ行く。カヘリテ新聞キリ  
抜ヲ整理ス。

十二月二日 月曜

午前九時<sup>〔ママ〕</sup> 臥。本日対読アルベキニ、三浦先生出  
校ナシ。

十二月三日 火曜

午後皇典。心学ノ話ヲスル。

十二月四日 水曜

午前。

午後。

夕、錦田君ノ家ニ行キテ謡曲。錦田君、友枝君、予。  
本日夜勉強出来ズ。腹工合悪シ。

十二月五日 木曜

八時前起。

午前、中右記学校ニテ読ム。兵範記ノコト調ブ。  
午後、テニスス。兵範記一時間調査。  
夜、謡曲、友枝君宅。羽衣、高砂。史海読ム。後、  
皇典原稿造ラントスレトモダメ也。本日モ勉強セズ。

十二月六日 金曜

午前八時半。

写真屋ニ心学ノ展覧品ノ写真ノ乾板ヲ持ち行く。  
カヘリテ鳩翁道話稿本ヲ校訂セントシ、鳩翁道話  
ヲカヒニ行キタレトモ<sup>勉強堂</sup>何処ニモナシ。却ツテ松翁  
道話以下二冊ヲ買フ。

皇典原稿ヲカク。神祇志料ヲ読ム。十二時前富永  
君突然研究室ニ来ル。電報ヲ持ち来ル。大高商ヨ  
リナリ。明日休ミノ由云ヒ来ル。

午後食後、出町柳ノ郵便局ヨリ速達郵便ニテ家ニ  
本日下阪セサル旨ヲ報ズ。女事務員甚ダ丁寧ニ取  
扱フ。皇典ニ行く。白河鳥羽天皇頃ノ仏法隆昌、  
僧兵横暴、国司巡拝ノ制廢頽、総社ノコトヲ云フ。  
帰路丸太町ノトコロニテ平岡君ニ会ヒ共ニツレダ  
チ帰ル。西川ニヨリ鳩翁道話ヲ求めトモナシ。  
写真やニヨリテ本日ノ写真現像ヲ見ル。皆ヨクウ  
ツル。

夕牛肉会。夜ヨリ勉強ス。兵範裏書ノコトヲ調ブ。  
蘭語一時間。十一時臥床。

十二月九日 月曜

夜少シ勉強シタレトモ初メヨリ疲労ノ気味アリ。  
興味ナシ。十時半臥。

十二月十三日 金曜

夜帰宅ス。六時過百万遍家を出てたり。

十二月十四日 土曜

高商。

十二月十五日 日曜

帰宅、在阪。夜帰ル。

十二月十六日 月曜

喜田先生送別史跡踏査会茶話懇親会。於集会所。  
本日喜田先生ハ銅鐸の話ヲせられたり。日本には  
歴史にのこらざる一ノ古文化ノ存在ヲ説かれたり。  
法苑珠林にある銅鐸と思はる記事ハ興味深かりき。  
後栗野君ハ多田荘ノ旅行談あり。

十二月十七日 火曜

午後五時半より学生集会所に於て浜田耕作君渡欧及楠基道君〔東京帝大支那史学1908卒〕の渡清送別の三高出身文科卒業生懇話会あり。僕と厨川氏〔巽夫〕ハ幹事なり。

本日皇典講究所の学期試験をなす。問題は一年級ハ平安朝の京都附近の神社の祭祀、(二) 王朝末の神社。二年ハ京都附近の神社と其祭祀、二神道史上の延喜時代ハ如何なる時代か。

羽田亨氏宅に本日の会の案内に行く。

十二月十八日 水曜

本日午後六時より学生集会所に於て読史会例会。読物ハ兵範記、後法興院政家記、蔭涼軒日録、貞永式目を読む。午後此ノ読物の印刷にて殊の外忙かりき。

本日教授会ありたり。内田教授の室にて。

喜田先生出発の由にて挨拶に来らる。

十二月十九日 木曜

午前午後学校にあり。夜、友枝君のところに行く。留守。錦田君を訪ふに本日ハ哲学会の由。かへりて芦野氏、富永氏と菓子を食べ話す。

十二月二十日 金曜

午後満済准後の対校。夜、小川教授宅に行き、今迄に調べたる牧野氏より送り来れる能登惣持寺の南膳部地区の話を行く。明日ハ大阪高商に行く為め朝早く起きざるべからず。

十二月二十一日 土曜

午前六時過起き、正七時に慶運院を出て二條熊野道より電車にて大阪に行く。本日ハ雨にて甚た困難。九時十分過に天満橋着。十時十五分前に大高商着。本日ハ試験也。問題ハ推古時代ノ文化、(二) 奈良平安朝の商業及貨幣につきて。試験ハ十時十分

より。

十二月二十二日 日曜

R 40P

L 3,5

瞳孔距離63

在阪。湯に行き後、眼鏡屋に行く。眼鏡をあつらふ。阿波殿橋の本やニ行く。国史大系なし。安土町の鹿田〔松雲堂(古書店)〕によりて国史大系を見る。四時出発、京都に帰る。大学にて写真機を取出し種板を買ひ(大学病院横)寺町の時計屋にて時計をとり、荒神橋の靴やにて靴をとり、兼常氏方にて乾板をとり、パンを買ひてかへり、乾板を入れなどすると十二時過也。R40

十二月二十三日 月曜

午前五時起く。雨の気いなければとも天寒く月あかし。水をあふるに寒し。昨日買ひたるパンを嚼る。湯もなく水もなし。

三浦教授宅に行く。未だ用意出来ず。

市電にのり行くに時間おくれたり。六時五十五分。次の八時十五分にて柏原に行く。村役場に行き中川泉三氏に会ふ。具行卿墓を見、清滝寺徳源院に行く。此処にて宿す。

十二月二十四日 火曜

徳源院より出で眼覚めて顔を嗽くに雪チラ〜として降り来る。山容白雪の間に濛乎たるもの其気甚たよし。已にして雪漸く降ることを増し、此れより出立ちたるときは白雪地を踏みて遠山近山の姿なかめ殊によし。霏々たる鵝毛の内をたとりて是れより成菩提院に向ふ。種々のものを見たり。三時出発、柏原より汽車にて京都にかへる。六時過也。かへりて高商の試験答案を点つける。壺時過頃まで起く。

十二月二十五日 水曜

学校に行く。三浦教授に会ひ昨日買ひたる地図を渡す。高商の採点表を郵送す。午後、全浙兵制をさかしたれともなし。テニスをなす。甚だながくなりたり。学校より近代文芸叢書の小説及笑話をもちかへりて心学の伝統につきしらべんとす。

十二月二十六日 木曜

午前遅くおきたり。阪本君来る。学校に行く、十二時。歳末整理。夜図書館に行き心学のことを調ふ。かへりて芦野氏のところにて謡曲をやる。壹時頃臥床。

十二月二十七日 金曜

朝遅し。近比朝ハ甚た元気なく、朝寐をする。毎日夜ふかし朝寐のみする。

朝図書館に行き心学のこと調ふ。午后研究室にて一寸読書。其れより内藤先生宅に軸を持ち行かんとし転宅、かへりに岡崎氏を訪ふ。五時かへり、図書館にて<sup>(読め)</sup>読書、心学ノことに関して。

本日疲労したれば九時図書館よりかへりたる後、日記の追記をなす。

【発信 牧野君禅宗ノコト】

【全浙兵制ハ館長か借りてゐる】

十二月二十八日 土曜

内藤、富岡、榎、学校。葉書、手当。

内田一書物一心学、全浙、地図、洋書。

三浦一汽車。

原。

明治四十五年当用日記補遺

趣考

方法論、本文

採訪、旅行

講演

発表

文書目録

批評 何人ヲ読ム。コントロールサー、ブライシヒ、ベルグマン

金銭出納録

第一種經常費 二二〔22円、以下同様〕

第二種經常費（図書刊行会・汽車賃） 五.五

準備金 一.

第二準備金 五.

〔計算式一省略〕

明治四十五年一月収支一覽表

支出

食料 9〔9円、以下同様〕

牛乳 1.35

宅料 3.00

油料 .5

炭 .3

世話料 .3

新聞 .45

共同新聞負担 .10

筆墨等ノ費用 2.5

学会等会費 2.0

湯銭洗濯等 1

雑誌 1.5

第一種準備 22.0

宴会等ノ準備金 2.5

新刊書 3.0

第二種 5.5

汽車賃 3.5

国書刊行会 2.0

〔欄外計算式一省略〕

住所人名録

京都田中村字樋之口二十三

新烏丸丸太町下

米沢元健

出雲路通<sup>(次)</sup>二郎

名古屋市南区熱田東町字玉ノ井五十八

中村健一郎

大宮頭舟岡建勲神社

松平藤佐

愛知豊橋市西八丁

福井忠治

高倉御池下ル児玉方 京ト

岩井武俊

転宅 新町頭字岩栖院町 後藤方

大山友一

転 北海道小樽堺町畑五 端良一

寺田貞次

宇治山田市宮後町字四谷一三一

清原貞雄

二月十二日転宅通知

紀伊郡東九条村

梅原末治

東京市牛込区市ヶ谷田町二丁目十三 小林方

松本茂平 三月卅日転宅通知

大連市近江町満鉄宿舍D区五番九号 中野竹四郎

金沢市新堅町三丁目八十二 加藤方 牧野信之助

拾月五日報告

[挟み込み 演劇番組表一省略]

[挟み込み 名刺] 西田直二郎

大正二年当用日記（東京博文館発行）

一月

京都ノ心学

惣持寺ノ地区

兵範記ノ研究

王朝末ノ京都

播磨ノ鍛冶

知足院ト関白忠実

泰山府君ノ祭

賤民研究 古代ノ祭

氏族研究

世業ト遺伝

一月十三日 月曜

本日ハ皇典学神祭ある日なり。本日は行かない。芸文原稿として京都の心学を書き昨日午前脱稿。京都にかへりて九時より清書す。二時頃に至りて

漸く半数八頁ばかりを記したばかりにて遂に寝につきたから、本日ハ朝早くより起き、但八時頃なり。学校にて清書した。正午までかゝる。午後三時過<sup>[藏]</sup>之れを植田寿造君宅まで郵送する。三時五十分頃よりテニスをなす。久し振にて心身甚だ愉快。五時食事、入湯、其より図書館に行く。皇典会誌の原稿をかゝんため也。

【書物を繰りながら雑誌を読む。実業日本の体力号〔『実業の日本』16-1、1913.1〕を読むだが大に利益を得るところあった。本日より早起の利を感ずること大である。此の雑誌にもありたるが早起ハ確かに精神上利益あることを知り得たり。本日気分最よろし】

【発受信 谷井濟一兄ヨリ来信。夕方之レヲ読ム。考古学会ノ入会ノコト也】

【受発信 谷井濟一君ニ、雑誌ヲ一月分ヨリ送ラレタシト云フコト】

一月十四日 火曜

午前八時前に蹶起離床。本日より早起主義ナリ。学校に行きたるは九時です。本日皇典ニ行<sup>[にか]</sup>つきて其の腹案をつくる。初め京都ノコトを話しせんと思ひ、平安通志などを見た。又院政時代ノことを話さんとして、大日本史近衛天皇ノトコロを見たれども何分間ニ合ハザリシ、ヤメテ十一時半頃、鏡ノ話ヲセントス。之レニツキ、考古雑誌ト鏡と劔と玉〔高橋健自『鏡と劔と玉』富山房1911〕の二冊ヲ持チテ学校ヲ出テタリ。天寒うして道ニ之れを読まうとしたれどもやめた。向ふに着きたるときは一時五分過ナリ。本日より此方も時間励行なり。一時間半ばかり話しをしてかへる。S受取、尚此外歳末の講師慰労会欠席者に<sup>[相換カ]</sup>□□券として金壹円ヲ得、三時半研究室にかへる。三時半より四時までハ何も出来ぬ。中途に便所に行きたりなどしたから益何も出来ぬ。四時家ニかへり四時半夕食。其れより木村の室にて富永氏ト鬪球盤にて勝負を争ふ。十一時まで立ちかへり院長、廣部、木村とす。



之れより臥床。本日ハ何もせさることとなる。可惜――。

一月十五日 水曜

午前八時起きたり。学校ニ行き皇居年表ナド読ム。午前中之ノヤウナルコトニテツブス。午後皇居年表ヲ読ツゞタルニ三浦先生来ラレテ芸文ノ話出テ、先生ノ原稿ハ訂正スベキトコロアルニヨリ取モドスコト能ハズヤト云フ注文ナリ。之レヨリサキ植田君ハ郵便ニ已ニ出シタルナラント思ヒシガ、植田君ヲ尋ヌルニ居ラズ、其レヨリ長者町裏ノ門西入岩原方ナル宅ヲ尋ネニ行ク。宿ニテ裏ノ門ヲ尋ヌルトコロ、宿の息子ハ上長者町トシテ上立売ヲ教ヘ相国寺方ヲ向ヒ行ク。之レヨリ後、下ニ下カリテ上長者町ヲ西ニ行クニ裏ノ門ハ堀川ヨリ遙カニ西ナリ。漸ク行キ一時間半バカリ話シテ帰ル。智恵光院ヨリ電車ニノリテ出町ヨリ宿ニカヘル。五時也。本日牛肉会ヲナス。芦野君ノ御土産松笠(饅頭)ヲ出サル。八時半カヘリ兵範記ノコトヲ調べントス。後富永君話シニ来リテ十一時半マデ話ス。

一月十六日 木曜

八時起ク。本日ハ八時ニ眼サメ起キアガレハ八時ノ笛ヲキク。学校ニ行ケバ未ダ九時前五分也。皇居年表ヲ読ミ、又風俗史ヲ見、大ニ著述ヲナスコトヲ考フ。京都ノコトヲ調べントス。午前ハカクノ如クニシテアマリ大シタコトモナスコトナシ。午後岩橋君ノ先日ヨリノ頼ミナル西福寺ニ行カントス。天気晴朗ナレバナリ。一時前宿ヲ出テ吉田山ノ東テ廻リテ南禅寺に行き西福寺ヲトヒテ上田秋成の木像ヲウツシ、又其厨子ヲウツス。此ノ厨子ハ三室ニテ甚だ奇也。天井板ト云フハ加茂社ノ木ノ牀板ナリト云フ。秋成ノ顔等中々ニ面白シ。厨子ニハ野之口隆正の記したるものあり。写しとる。又墓ヲ写ス。本日写真機ノ伸縮甚だ意の如クナラズシテ大ニ困リタリ。又同寺ニハ秋成筆の軸一あり。又富岡鉄斎、<sup>(富岡)</sup>謙蔵、藤岡東圃、島華水等のよせ書

あり。

谷井君ニ出ス考古学雑誌ノコト。

【夜ハ図書館ニテ八十島使ノコト調べ。又満濟准后日記ノ本ヲ研究室ニ置キタル儘西福寺ニ行キタルヲ以テ、夜之レヲ倉ニシマヒニ行ク。本日ハ天気晴レタリ。風寒シ。後夜ニナリテ雨降り出テタリ。丙 Studien/甲 Werk/乙 Gefühl】

一月十七日 金曜

【la vie intellectuelle la vie volontaire】

一月十九日 日曜

○吾人は何もえらくならなくともよい。凡てのものをあきらめよ。淡水の如くにして此の世を終らしめよ。身分不相応は破滅の因である。あせるなかれ。我身をは不幸なりと思ふなかれ。不幸は之れ仮装せる幸福なりとし、常に自ら慎みて楽しんで謡せず悲しみて乱ることなかれ。君子一生時に会はざるも尚自ら愧しずんは幸なり。皓として雪の如く清きこと月の如くなるべし、世を怨み人を恨むなかれ。是れ天の命なり。天命に安じて身安く体<sup>(骨)</sup>絆かにして神舒びたるの時、之れ吾人が老人の最大幸福をうけたる時なり。貪と痴と瞋とは吾人の身賊なり。

一月二十四日 金曜

ビーフ会。終ルトキ<sup>(文夫)</sup>岡崎君来ル。九時頃マデ話シテ行ク。氏ハ何か教ゆべきところなキかと云ひて尋ねられたり。読書会を近日開くべき事など云ひてゐたり。九時頃になりて予が大商ニ行クコトヲ聞き、本日モ急グベキ日ナリトテ帰ル。其れヨリ用意して帰る。大阪につく時は十一時五十分也。本日はかゝる次第にて大商の予習をなし得ず、日本商業史、国史眼を持ちかへる。電車中にてハ商業史を少し読みたり。

本日は内田教授が一年の演習として、熊沢蕃山、加賀松雲公、池田光政、貝原益軒、徳川光圀につ

きて学生に書物を見せらるべしと云ふ事にて、昨日よりの命にて本朝七時前に起きて学校に行き其書物を調ふ。彼是の用事にて皇典の予習も出来ず、歴史地理、京都神職会雑誌を持ち行きて話をなせんとしたり。熊野王子社の事を話す。

一月二十五日 土曜

七時半頃起ク。九時前大商に行く。鎌倉の滅亡、南北朝の争ひを述べ天竜寺を立つることまで行く。之れ天竜寺船の事より外交をとかんとする也。学校より電話にて四方君〔天王寺中学1904卒〕の出勤を尋ね、午後三時半過、株式取引所を訪ぬ。菅原君（斎藤君）来れり。島本得一君〔天王寺中学1902卒〕に会ふ。三人及四方君と共ニ桃陰同窓会の事を話す。夜暮れてかへる。今昔物語を少し読む。

一月二十六日 日曜

午前九時頃起く。湯に行く。今日ハ余程寒く地上に淡雪ありたり。天神の御膳をなす。午前十一時半頃朝飯を食し、一時頃家を出てたり。博物館に旅行展覧会あること昨日大阪株式取引所に行く時見たるため、何かの参考と思ひて之れを見て後帰京せんとして出てたる也。然るに博物館にてハ其の展覧会ハ来月十一日より三月頃まで開催する旨の掲示をなしたるに過ぎずして、現今ハ只新年展覧と云ふものをなすのみなりき。失望したれとも仕方なければ徒歩天満橋に出て電車にてかへる。途中書島にて下車して本日竹田の安楽寿院に行かんとの計画をなしたるを以て、伏見を通りて鳥羽より安楽寿院に出づ。渡辺勘三郎宅に行き古文書（今般大学が買取らんとするもの）を見る。日暮之れを出て、師団前より乗車して帰洛す。師団前ハ此以前牧の君と来りたる時乗りたる所なるが其時ハ余程近しと思ひたるに、今度ハ甚た遠く感したり。京電に乗らんとするならば城南宮道にて下車すれば安楽寿院ハ直く其側なり。帰れハ本日ハ同宿藪田為三、大倉安蔵氏の誕生日

記念としてシルコ会也。極端に濃厚なるシルコを頂戴スル。種々談話あり。十一時半マデ話シタリ。

一月二十七日 月曜

本日学校にて、午前三浦教授より読史会ノコト相談ありたり。学生側の意見を聞き決定せんとす。午前満済対読。十三枚ばかり行く。本日ハ時間少カリシ為也。午後三浦教授より東京出張の事を聞く。大乘院日記の調査ノ為也。大学にて之れが副本をとるにつき、内閣文庫に行く用を云はる。又後兵範記につきて近衛家に行くべき事も云はれたり。夕食後、院長、大倉、芦野君と共に寺町マデ散歩。帰りに学生集会所に行きミルク菓子を食べ。小生之れを払ふ。七十三銭。かへりて宿にてハ婆さん来りて息子が近頃遊ひて仕方なしと云ふ事を云ふ。次に藪田（和）君来る。婆さん之れによりて帰る。藪田君ハ英語を問ふため也。次に院長来る。藪田帰る。院長ハ先きの会食の費を払はんとす。之れを聞き芦野君来り又話する。次に又大倉来る。皆尻をすへて話す。後富永君菓子を持つて来る。皆話しする。十二時前也。

【発信 清原君に手紙出ス。上京ノコトヲ報ズ。宿ハ本郷区森川町三軒館。磯の君に手紙（読史会ヲ報ズ）】

【受信 牧野氏より手紙。地図ノコト進上、□解説ヲ乞フト。聖武天皇論来る。人類学雑誌来る】

一月二十八日 火曜

午前七時半起ク。九時出校。読書せんとして百練抄を見、又愚管抄を見る。皇典の原稿造ラントスル。高橋君と壬生家の令ノ奥書ノ写真ノコトヲ彼是話してゐる。後、住吉神社の神代記ノ事を思ひ出して之れを見んとしたり。而し尚又日吉社ノ事を話す方よからんとして神祇部を見る。住吉社神代記の記事が神祇全書の内にあるかと思はる。即ち神祇史の広告を見るに、其ノ神祇全書の広告中に此ノ書らしき名見えたり。

午前中、昨日藤原貞幹の自筆なりや否やのかん定をなす。

皇典、熊野社ノ雑話、牛王の話などして一時間を費し、後一時間ハ日吉社ノ話也。

散歩、芦の、西村。眼鏡や白井に寄り眼鏡の修理を依頼す。かへりに共に富田に行き菓子食ふ。

図書館にて安南遊記、安南〈 〉(〈 〉前集之内)ヲ読ム。万里石塘ノコトト思ハル記事アリ。

一月二十九日 水曜

【粟の・江馬君に電話】

一月三十日 木曜

本夕読史会アリ。此回ハ記録の講読ヲヤメテ各自研究ヲ発表スルコトシテ、川島君ノ長崎平戸博多ノ旅行談アリ。次ニ僕ノ惣持寺世界図ノ考証、次ニ三浦先生ノ北条時頼巡行説ニツキテ瀬川秀雄氏ノ史学談話会ニテ談シセラレタル巡行説ニツキテノ反証ヲ反駁せられたり(瀬川氏ノ文ハ読売新聞ニ載リタリ)(ノートブック参照。Note Bookノ部)。

帰りテハ東京行ノ準備ヲナシタリ。持ち行くベキモノヲト、ノヘタリ。明日ハ大商に行くため帰る日なれば忙しきゆへなり。午前二時過まで準備ヲナシタリ。

【受信 牧の君に葉書ヲ出ス。惣持寺ノ地図ノコト】

一月三十一日 金曜

午前、兵範記ノコトヲ調べネハナラズ。又皇典講ノ原稿ヲツクラネバナラズ忙し。先ヅ皇典ノヲ調べ。十一時マデカ、リ之レヨリ兵範記ヲ借りタルトキハ已ニ二十時ナリ。事務の方よりして旅費ヲ取りに来るやう云へたるを以て、昼食后本部に旅費ヲ取りに行く。金貳十六円ノ手形ヲモラフ。日本銀行京都支店に行くべきなれとも忙しければやめて、皇典ヨリかへる。三浦教授ヨリ東京にてなすべき色々用を云はる。夕食後、図書館にて七時半まで

兵範記の事を調ぶ。七時半より内田教授の宅ニ伺ハントシタルガ来客のやうにてやめ、宿ニかへリテ大阪行ノ準備をして又内田先生ノ宅を伺ふ。客尚ありやめて大阪に帰る。電車中にて大商ニテ教ゆること調ぶ(二月八日追記也)。

二月一日 土曜

大商に行く。

帰途直ちに平の町の眼鏡やに行く。眼鏡の修繕ヲトリニ行く。かへり途、心齋橋丸善にて万年筆ゼニスを買ふ。又オリオンの修繕をしてもらう。午後六時頃、家を出て、京に行く。九時宿に着く。内田教授の宅に行かんとしたれども其家の前に行きたれと、遅くあれば内に入ることはやめたり。準備をと、のへる。

油、ハミガキ等買ふ。京都にかへるとき丸太町にて電車をまつとき旅行用鏡を買ふ。

二月二日 日曜

十時頃内田先生のところに行く。先生ハ風邪をひきたりとのことにて会ふを得ず。転りて新村先生ノ所に行く、不在。名刺をおき帰る。立ちに富岡先生ノ宅に行く。本日謝客の日なり。心学のこと及、岩橋より申来る茶神問答及秋成肖像のことを頼む。十二時過出て、直ちに樫木町より鳥羽に向ふ。安楽寿院内渡辺方に古文書をかりに行き、桃山に参る。せんべいを買ふ。尚種々考へたり。昼飯を食ひ又上りて埴輪を買ふ。かくて帰れば日已に没す。早食用意し又ビーフ会かありし也。学校に古文書ををき車にのりて七条に来る。約一時間も早し。九時二十三分にて東行き。岐阜に着く頃よりねむくなり、名古屋は夢の中なり。

二月三日 月曜

沼津あたりより夜明く。

午後文部省、宮城、日比谷、帝劇、中央停車場。水谷ニ逢フ、大溝。夜岩橋。

二月四日 火曜

午後、<sup>〔国男〕</sup>柳田課長〔内閣書記官室記録課〕ヲ訪フ。

二月五日 水曜

内閣。

二月六日 木曜

内閣。

二月七日 金曜

内閣。

二月八日 土曜

内閣。夜、山本君ヲ訪ヒ山本君来ル。大成中学ノ前ヲ通ル。

【兵範記ノ研究。室町時代ノ風流】

二月十日 月曜

松本来ル。

【帝劇】

二月十一日 火曜

八時半起く。けふは紀元節にて岩橋君と見物をする約束をなしたれば、九時頃に出発する故、早く起きんと思ひたるか眼さむれば寒風吹きて障子にあたる音すさまじし。九時前おき、食後岩橋の来るを待つ。其間、惣持寺の地図の原稿を清書す。十時過に岩橋来る。予、岩橋君を誘はんとして行きかけたるとき来る。共に出て、先づ九段に行き遊就館を見る。之れより藪そばに行く。出て、芝公園に行く。寒し〜。かへりハ帝劇に入る。第一、あきらめ、第二、忠臣講釈、矢間喜内浪宅ノ場にて重太郎か別れに来るところ、第三、長唄常磐津朝比奈釣狐、第四、演劇魔女之森、第五に珍竹林あれと第五は見ずにかへる。腹へりたるを以て近所ノソバヤに行く。其より手紙をかき寝ニ就く。

【発信 朝、谷本、<sup>〔ママ〕</sup>阪口、内田諸先生】

【史料 学長】

二月十二日 水曜

八時半起き髭を剃る。九時半史料編纂掛に行く。<sup>〔義成〕</sup>田中主任に逢ひて話を承ハリ各室を巡覧する。紹介せられたる人々は先づ古文書室にてハ芝葛盛、伊木寿一、南北朝部にてハ藤田明、室町、渡辺世祐、和田英松、辻善之助、外交文書にてハ~~—————~~。藤田安蔵君に会ひ、午後経覚<sup>〔私〕</sup>要抄<sup>〔抄〕</sup>を見る。三時半になると取りに來れり。

湯に行く。夜、松本茂平君の宅を訪問する。市か谷田町にており（新見付停留場）、漸くにして家ヲたつぬ。美濃屋と云ふ鶏肉屋也。九時半まで話しす。

歸りて三浦先生、荻山、牧の、慶運院への絵葉書をか。二時頃か臥寐。

二月十三日 木曜

八時半眼さまし起き、十時史料に行く。経覚と大乗院とを見る。午後三時頃までかゝる。十時<sup>〔参次〕</sup>三上主任をたづねて話をうけたまはる。夜手紙ヲカク。

【発信 三浦先生、荻山、牧の、慶運院。夜、内藤先生、松本、学長、皇典講、休講延期ノコト】

二月十四日 金曜

午前、<sup>〔私〕</sup>史要鈔ヲ数フ。中山校長ニ話シラスル。三時半頃要鈔ヲトリニ來ル。之レヨリ<sup>〔勝美〕</sup>黒板氏ヲ尋ネテ応接室ニテ話シスル。明後日標本室ヲ案内スベシト云ハル。中山校長ト共ニ史局ヲ出ル。岩橋來ル。十一時マデ話ス。

【発信 内田いろ〜ノコト。清原近状】

二月十五日 土曜

午前中史局。史料、弘長ノトコロヲ写ス。同日ハ九時ニ行ク。役員未ダ出ソロハズ、シハラク待チ



テ本ヲ出シ来ル。十二時前電話にて近衛家ニ問合せ。藤田明氏ヨリ住吉家文書ノ花押ニツキ話シシタシト云ヒ来ル為、史料ヲ写スコト十一時過ニテヤメタリ。中山校長今日ハ来ラズ。八代国治氏ヲ訪フ。先メテ也。和田部長ノ所ニテ話シシ、其時京都大学所蔵文書ノ真偽ニツキ云ハル。

【受信 新村・内田両先生ヨリ。拝借書物取扱ヲ丁重ニスヘキコト。文科ヨリハ出発届及帰学届ノコト】

二月十六日 日曜

朝十時ヨリ上野図書館ヲ見ル。カヘレハ二時頃。其レヨリ小川先生ノトコロニ行く。又、芦野氏ヲ訪フ。夜、上野図書館ニ行カントシタレトモ、紙ヲ買ヒ又絵葉書ナト買ヒテアルト時間の都合悪シクナリ、食事済みたるときは六時過頃也。仍岩橋ノ処に行きて話す。羽織の紐を忘れてかへる。

【発信 文科ニ帰学届ヲ出ス。小松院長。】

二月十七日 月曜

午前八時起、九時史料ニ行く。要鈔少シ急キテ見ル。十一時マデ六冊ヲ見ル。十一時ヨリ黒板先生ヲ尋ネテ史学標本室ニ行く。今西龍君ハ留守ナリキ。博士の案内にて標本室ヲ見、其傍の事務室ヲ見ル。其レヨリ史学研究室に行く。大類文学士ニ会ふ。<sup>(申)</sup>其向ひの机にハ大谷勝真文学士あり、談話ス。室の排置、カード、書籍ヲ見ル。次デ今西龍君来ラル、牧野君来ラル、話シラスル。後其室ヲ辞シテ今西龍君の室ニ行キテ暫<sup>(時)</sup>暫寺談ズ。

午後一時半過くる頃より近衛家ニ行く。巢鴨の停留場マデ行き其レヨリ市外電車にて目白ニ行く。不案内のため一電車ヲ空待チス。近衛家ニ行く。三時ヲ過グ。小便ナトシタルため遅レタリ。五時半辞シテカヘル。近衛家にてハ兵範記の古巻ヲ出シテイナイノデ落胆スルコト限ナシ。実ニ落胆シタリ。

岩橋ヨリ国書刊行会の義人纂書〔「赤穂義人纂書」第1、

第2、補遺、1910~1911〕ヲ三冊持来る(夕方)。

中山校長午前中僕ノ居ル間ハ史局ニ来ラズ。已ニ帰りシカ。

【芸文ノ寄贈ノコト聞ク】

【発信 内田・新村、注意ニ対スル御礼。帰日ヲ云フ(書く。出スハ明日也)。栗野君市民騒擾の絵葉書】

四月五日 土曜

<sup>(註)</sup>  
□ 誉上人法要。

四月六日 日曜

午後、洋服屋ニ行く。

四月七日 月曜

宗祖降誕会ニテ抹茶会アリ。

【大阪】

四月八日 火曜

积尊降誕会ノ会アリ。午前河内地方旅行。午後一時頃ヨリ雨フル。柏原駅ヨリ引キカヘス。午後六時出発京都ニ来ル。

一時頃話ス。慶運院ニテ、富永、芦野、堺。

四月九日 水曜

十時頃起ク。午後学校ニ行く。三浦先生ヘ手紙ヲ出ス。大乘院ノ目録ヲ送ル。夜湯ニ行き、カヘリテ心地ヨク大ニ勉強ス。寺院ノ文化的事業ノコト調ブ。

四月十日 木曜

午前七時半ニ起ク。八時学校ニ行く。兵範記ヲ調ブ。此ノ機会ニテ之レヲマトメント欲ス。嘉応元年八月九月ノ巻。一卷ヨリ進マズ。午後テニスヲナス。三時過。三時ヨリ五時半マデ兵範ノ裏書ヲ調ブ。五時過今西龍氏来、国史研究室ニテ談話。六時湯に行ク。



郷土研究室社へノ手紙ヲカキ、兎島高德ノコト片付ケントス。明日ハ高德ノコト片附ケン。

【発信 郷土研究室】

四月十一日 金曜

午前七時過起床、今日モ早起きなり。起くるときハ甚た睡たかりしも努力して起きたり。八時前より机に向ひて高德公ノ調書を書く。午前中に出来上げんとしたれとも容易に出来ず。午後も続行して四時までかゝり、四時より疲労を回復するため庭球をなす。六時前やめ食事入浴。夜又高德公ノコトヲ書く。之れにて大抵道筋ハ出来上る。明日より閑々に字句修正及清書をせんとす。斯くの如くにして本日ハ学校に行かず。学校に行かざるときハ矢張仕事ハ出来るもの也。本日気分爽快。十二時臥床。

四月十八日 金曜

午前七時半起床。先日以来毎朝早起也。八時学校ニ行ク。本日ハ皇典講究所ニ行キ文学史ヲ教ユベキ日ナリ。本日行クガ本学ノ最初也。其腹案ヲ少シ考フ。十時ヨリ裏書ノコトヲ調ベントス（兵範記）。大ナル捗ヲ見づ。

午後一時—三時、皇典講究所。

三時半ヨリ研究室ニアリ。内田先生ヨリ、クルツールデヤゲヂンワールトノ内ノ哲学史〔Wilhelm Wundt, *Allgemeine Geschichte der Philosophie*, 1909, (Paul Hinneberg (ed.), *Die Kultur der Gegenwart*)] ヲ借用シ来ルベキコトヲ命セラレ、哲学倫理学教室ニ行ク。四時ヨリ五時半マデ扶桑略記ヲ見ル。食事、テニス、入湯、食菓物。夜勉強セントス。兵範記裏書整理セントスルガ何ダカ気が進マズ。慶運院日記ヲカキ、後又裏書研究ヲ初メントスレトモヨロシカラズ。

【寺院ノ人文的事業、兵範記、兎島高德。旁、知足院】

【受信 家ヨリ荷物ノコト】

四月十九日 土曜

八時起床。午前学校、裏書研究。内田教授来室。午後一時マデ。午後一時半昼食。芦野氏ト談話。三時半学校研究室ニ行ク。六時マデ。六時夕食。六時ヨリ下駄足袋ヲ買ヒ来リ、母ガ三条養福寺ニ来レルニ、預レル着物ヲ持チ行ク。カヘリ京極ヨリ回ハリテ寺町ニテ富永、西村、小藪、山城君ニ会ヒ、京極ニ行キ歌舞伎座前ニテ一寸活動写真ニ入ル。二ツホド見ルガ少シモ面白クナシ。十二時カヘル。十二時ヨリ読書。芦野氏一時前ニカヘリ来リ一時間バカリ話シスル。後、少時読書シテ臥床。

四月二十日 日曜

午前八時半、九時頃カ起床。近来時計狂ヒヨリテ時計ヲ用ヒズ時間少シモ分ラズ。午前中裏書整理。一向面白クナク且捗ラズ。午後、京都図書館楼上ノ京都史蹟会、大嘗会即位式ニ関スル陳列ヲ見ニ行ク。栗野君及藤田君<sup>〔元春〕</sup>ニ逢フ。カヘリニ栗野君ノトコロニテ話ス。五時帰宅。母本日宿ニタツネ来リタルコトヲ知ル。雨降り出タル故、大ニ困リテ尋ネ来リタル也。夕食後、母ヲ三条養福寺ニ訪フ。雨降ルコト切りナリ。明日ハ晴天ニナレカシト祈ル。カヘリテ裏書ノ整理スル。

養福寺ヨリカヘリ路ニテ西川にて哲学綱要〔桑木巖翼、東亜堂書房1913〕、独逸語雑誌ヲ買ヒ来ル。哲学綱要中欧米ノ哲学界ノ印象ヲ読ム。

四月二十五日 金曜

午前八時前起床。八時半学校に行ク。オックスフォードノ社会法制史（ヒノグラドッフ）〔Paul Vinogradoff (ed.), *Oxford studies in social and legal history*〕ヲ読ム。兵範記裏書ノコト三十分許書ク。午後ハ皇典ニ行ク。文学史ノコトヲ云フ。カヘル時暖クシテ堪へ難ク感ズ。家ニカヘリタリ、四時也。新聞ヲ整理ス。夜間読書。扶桑略記読了。十二時就床。

六月

一、兵範記研究

一、寺院人文研究

暑休中マデニ発表

一、兵範（史学研究）

二、泰山府君（芸文）

三、忠実ト知足院（歴史地理）

九月マデニ発表

四、寺院人文

五、京都

六、陰陽道

七、古代氏族制

七月

王朝末ノ京都、本月中ニ仕上グ

知足院ト関白

豊太閤と能楽（大阪朝日）

九月一日 月曜

新涼早ク来リテ九月一日ハ已に涼氣著シ。身体健ニシテ精神亦快朗。暑中休暇中ナスヘキ予定ナリシ報告ノ文ヲ送リツ、アリ。（十月一日追記）。

九月九日 火曜

夜京都ニ入ル。本日高商、此学期始メテ出講。五日ヨリ開校ナリキ。

九月十日 水曜

研究室ニ行ク。内田先生ニ会フ。

九月二十四日 水曜

天王寺ニ行ク。

九月二十五日 木曜

北小路氏来宿。近衛家文庫ヲ移転スルコトヲ云ハル。

皇典。

九月二十六日 金曜

皇典。

九月二十七日 土曜

二条城。

九月二十八日 日曜

二条城。

九月二十九日 月曜

二条城。

九月三十日 火曜

読史会、午後六時ヨリアリタリ。余ハ大阪ニ行ク日ナル故、大阪五時ニ出発シ七時半参会。

・実隆公記

・実隆書状

○三浦先生「穂積博士著由井正雪と徳川時代の養子法」ノ批評。

十月一日 水曜

本日午前八時半出校。九時頃ヨリ二条城。兵範記ヲ借りニ行ク。俵ニ載セテ帰ル。午後二時也。

四時ヨリ図書館ニテ川島君、荻山君、友枝君ト共ニ会ス。谷本先生送別会ノ下相談。

夕ヨリ散歩ニ行ク。本日昼食ヲ三時頃ニナシ、五時半頃夕食ヲナシタルタメ腹加減悪シシ故ニ寺町マデ散歩ス。諸道山河地名要記（略）ヲ彙文堂ニテ買フ。一円四拾銭。商業史要、永田健助〔思誠館1900〕、世界商工史ヲ買フ（集古堂）。

十月四日 土曜

京一中・京一商ノボール試合を見る。

十月五日 日曜

午前研究、王朝。古鏡展覧会を見る。夜読書。

十月六日 月曜

夜大阪にかへる。

夕方より鹿ヶ谷なる松本学長のところに挨拶に行く。不在。名刺をおきて挨拶してかへる。

大阪にかへれば雨少しく降る。

十月七日 火曜

雨ふる。大阪高商に行く。雨を冒して午後三時より大阪図書館に行く。五代友厚論のことを調べんため也。不幸にして曝書中にて休館。又雨に艱みつゝ家に帰る。

京都に帰らんとしたれとも、雨ふること甚く風さへ加はりて途中危険を慮り、本夜かへることを見合す。明朝早朝かへらんとす。

十月八日 水曜

大阪より帰る。此日五時に起き六時出発、八時十分前七条京坂電車停留所着。

本日は三浦先生か新建の研究室の設備につきて相談せんと云はれたるために、かく早く帰ることとなる。

十月九日 木曜

神道史。農業ノ神、保食神の事。

十月十日 金曜

満済対読。四時より谷本教授送別会準備委員会。五時半より大正庵及慶運院の朋友の会あり。会場麩屋町丸太町下ル巴。十一時頃かへり之れより王朝末京都の推敲をなす。大に面白くなりて来りたれとも時一時半なるを以て止む。明朝此の部分だけ書き上げんとす。

【受信 清君貞雄君、雑々】

十月十一日 土曜

朝在宅。八時より王朝末の京都、貨幣のところを推敲す。十時までするつもりなりしか十時前なりと思ひて学校に行きたるに十一時なり。為めに芸

文の編纂会か十時よりありたるにおくれて甚た相済まず、十一時教官室に行けば、丁度今済みて友枝君と植田君ノ去るところ也。午後運動（一時—二時半）。二時半より満済准後の今まで対校のとき不明の部分を選び抜く。本夕三浦先生ノ紹介にて丁度入洛中なる史料編纂官補鈴木<sup>(二)</sup>次氏に其れを見てもらはんと思ふため也。六時半までかゝる。夫れより三本木により月波楼に至る。三浦先生ハ丁度来られ居たり。藤田明氏と同宿也。九時半までに尋ぬ。

牧野信之助君来信（旅行ノ概要、莊園時代ノコト）。

【岩橋小弥太君へ西域記送ル】

十月十二日 日曜

【三井寺、読史会採訪】

十月十四日 火曜

大阪ニ行ク日。高等商業ハ修学旅行中ニテ休ミ也。知ラスシテ行ク。案内ナカリシ為メ也。

三時出発、五時半集会所ニ行ク。送別会出席者三十四名。会費壹円貳十銭。寄付五円也。本夕ハ甚た盛会也。

【谷本教授送別会（午後五時半）】

十月十五日 水曜

皇典。

十月十七日 金曜

朝読書。読史会記事ノ原稿ヲ清書シ送ル。午後一時ヨリ二時テニス。入湯。少読書。夕食。夕、五代論ヲカク。

【内田教授講演、幕末ノ京都梗概、新聞紙上ニアリ。七卿西竄五十年祭妙法院ニアリ。土方久元伯ノ講演モアリ】

十月十八日 土曜

九時学校ニ行ク。本日奈良女子高等師範学校歴史

地理科生徒十四五名来ル由ニテ国史研究室ニテ陳列アリ。手伝フ。十時頃来ルト云フ予告ハ変シテ十二時半トナリ、夫レニテ待ツ。同校教授田中一元氏来ラル。三浦先生ニ紹介シテ頂ク。午後同生徒ノ校舎ヲ観覽スルニ案内ス。地理研究室ト図書館ヲ案内ス。

本日内田寛一君、有高巖君ト紀念写真帖ノコト相談。カヘルトキ荻山君ニ出會フ。共ニ宿ニ帰り五時マデ話ス（三時ヨリ）。午後三時昼飯ヲ食フ。

夕、寺町マデ原稿紙ヲ買ヒニ行ク。堺君同道。丸太町ニテ内外近世商業史〔平沼淑郎講述『近世内外商業史』早稲田大学出版会1909ヵ〕、商品地理〔池本純吉『日本商品地理』同文館1905ヵ〕、二冊購求（四十銭）也。Meyrノ商業史〔Mayr.Richard『世界商業史』高尾常磐訳、博文館1912ヵ〕ヲ讀ム。時ニ夜深更。

【受信 松岡君手紙来ル。富永君】

【紀念写真帖ノ相談會】

十月十九日 日曜

晴天、本日天皇皇后〔ママ〕 陛下入洛セラル、日也。

八時過起床。午前中、五代友厚論ヲ讀ミ直シ清書ス。午後二時前マデ同様。二時ヨリ散髪ニ行ク。丁度砲声ノ遠クニナルヲ聞ク。兩陛下ノ着京ナルヲ知ル。御苑内ニ向ヒシガ丁度入御ノトコロニテ鳳輦已ニ入ラレタリ。走りタリシモ甲斐ナシ。龍顔ヲ拝スルヲ得ズ。散髪ノ後帰ル、三時半。

ブッヘルノ原始人民ノ經濟狀態〔Karl Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft*〕ヲ讀ム。夕食後亦五代論清書。九時ヨリブッヘルヲ讀ム。腹式呼吸ヲヤル。昨臥床前ニヤリタルトコロ心地ヨシ。本日朝食前ニモヤル。

十月二十日 月曜

【新研究室ノ設備ニツキ相談アル筈】

十月二十四日 金曜

【二十四、五日頃妙法院ニ行クコト】

十月二十五日 土曜

【松本〔赤太郎〕 教授送別會（午後五時頃ヨリ）】

十一月一日 土曜

〔以下朱筆〕 文科大学学友會大旅行。本日午前六時五十分出発。十時頃松本着也。中央線ニテハ、高藏寺多治見間ハ高藏寺川ニ沿ヒテ進ミ行クヲ以テ風光甚ダ美ナリ。又坂下駅ヨリハ木曾ニシテ御料林ノ深緑ノ内ニ紅葉、黄樹ノ点綴スル様實ニ言語ニ絶ス。松本ニ着キタルハ十時頃ニシテ、已ニ寢覺ノ床ノ見ユル処ヨリ夜ハ冥クシテ窓外ノ景色モ見ルコトヲ得ズ。永ク汽車中にアリタルコトトテ皆飽キテ寐ルモノモアリ。サレトモ汽車ユレテ悠カニ寐ルヲ得ズ。〔以上朱筆〕

十一月二日 日曜

〔以下朱筆〕 午前四時半頃ニ起コス。本隊善光寺行ハ七時半出発ナレトモ、諏訪行ノ別隊ハ七時出発ナリ。朝食後尚少シ時間アレバ松本城ヲ見ニ行ク。昨夜松本小学校ノ演説ニヨレバ松本城ノ天主閣ハ日本ニ於テ最モ高キモノ也ト云フ。今ハ公園トナレリ。天主閣ハ平地ニ屹立スルモノニシテ其威風昂ラズ。何トナク見スポラシキ感ヲ与フ。周圍ニアル曲郭ノ石垣モ低ク堀モ小サシ。本日ハ中学校ノ運動會ニテモアルニヤ、天主閣下ノ広場ニハ埒ヲ回ラシテ旗竿ナド立テアリ。天主閣登料金參銭。登レバ西方ニハ乗鞍ノ連山ヲ見得ル。前山アル為メニ纔カニ乗鞍嶽ノ峻峰ヲ見ルノミ。甚た壮大ナルモノ也。九時半諏訪ニ着ス。十四名ナリ。松本・鈴木〔虎雄〕ニ先生同行。温泉ニ浴シ昼食ヲナシ城ヲ見テカヘル。塩尻ニテ本隊ト合ス。六時頃福島着。〔以上朱筆〕

十一月三日 月曜

〔以下朱筆〕 七時頃宿ヲ出テ興禪寺ニ行キ義仲ノ塔ヲ弔フ。塔ハ宝篋印塔ニシテ本堂ノ裏手ニアリ。

新シキモノ也。寺ニテ宝物ヲ見ル。覚明書状一通（写シトル）、当時ノ僧ニシテ狐ナリシモノガ書クト云フ般若心経、義仲所有甲冑、縁起、繪旨（享保妙心寺住持職ノコト）等アリ。是レヨリ上松駅ニ向フ。棧ノアルトコロ最モ景色ヨシ。四哩ヲ歩行シ上松駅ニ着シ、尚進ンデ寢覚床ニ行ク。十三町ナリ。十二時此処ヲ立チテ十二時四十三分ノ汽車ニテ京都ニ向フ。十時五十六分着。一行ニ分レテ大阪ニ行ク。十二時着。家ニカヘレバ十二時半ナリ。  
〔以上朱筆〕

十一月四日 火曜

〔以下朱筆〕大阪高商ニ行ク。富永君ノ会社ニ行キ忘レ物ヲ渡ス為メ也。富永君不在。置キテカヘル。午後十時夜ノ準備手伝フ。六時出発、京都ニ向フ。牧野君手紙。茶ヲ金沢ニテハ多ク植ユルコト。読史会ニテ近世開拓ノ特質ト云フ題カ人身犠牲<sup>〔ママ〕</sup>ノニツキテノ愚見カラ論ゼント。〔以上朱筆〕

十一月五日 水曜

〔朱筆〕「芸文原稿ヲカクコト」

十一月八日 土曜

多田神社行。原、喜田、三浦教授。箕面瀧安寺前ノ宿ニ泊ス。木崎好尚。

【是レヨリ以後ハ十二月十四日追記シタルモノナリ。

但シアヤマリハ無之】

十一月九日 日曜

勝尾寺行ク。寺ノ僧演説ス。夜カヘル。

十一月二十四日 月曜

此日午後四時ヨリ読史会準備相談会ナルモノヲ開キテ在京諸子ノ来会ヲ求メテ議定ヲナス。小生其プログラムヲ読□タリ。

十一月二十五日 火曜

高商。

十一月二十六日 水曜

皇典ニ行ク。朝ヨリ準備会アリ。原博士送別会。日暮れたれども尚準備ヲナス。米沢君ト共ニ原博士ノ送別会ニ行ク。

十一月二十七日 木曜

夜マテ広告ヲカク。朝モ広告ヲカキタリ。

十一月二十八日 金曜

午前、演題及プログラムヲ書ク。又陳列品ノ目録印刷スルコトヲ取ハカラフ。午後余<sup>〔ママ〕</sup>習ヲスル。

十一月二十九日 土曜

読史会ナリ。寒シ。

十一月三十日 日曜

午前清原君ト共ニ文展ヲ見ニ行ク。午後栗野君トコロニ腰ヲスヘル。夜御馳走ニナル。傘ヲカリテカヘル。雨フリテ寒シ。清原君、栗野君トコロニトマル。

十二月二十四日 水曜

【ニュートン祭大学ニテアル筈（大朝）】

大正二年当用日記補遺

大正二年一月十三日

午前六時半

七時

七時半朝食

八時 出校

十時

十二時

午後十時半執務休止

午前<sup>〔ママ〕</sup>十一時臥床。



十月	文具箱	.50	
七時起	櫛	.25	①
八時食事	カラ	.23	
十時 商業史	紙	.6	
十一時 臥床			

[欄外数字-省略]

大正二年 二月収支一覽表

収入			
	26 [26円、以下同様]		
	10		
〃	11		
	3		
支出			
万年筆	2.5 [2円50銭、以下同様] ⑤		
名札入	.28		
靴墨	.10		
汽車賃	4.02	⑤	
車代	.40		
桃山せんべい	.22		
<small>[鋼カ]</small> 鉏 価	.38		
埴輪	.22		
電車	.18		
鏡	.17		
<small>[香カ]</small> □油	.17		
齒磨	.5		
赤帽	.10		
牛肉代	.35		
弁当 (静岡)	.25		
電車	.9		
車	.10		
荷物アツカリ	.5		
湯	.3		
石鹼及箱	.24		

大正二年 三月収支一覽表

支出			
牛乳及パン	.14 [14銭、以下同様]		
印紙	.75		
画ハカキ	.10		
牛乳	.4		
印紙	.6		
祝儀 (宿)	1.00		①
女中心付	.50		
本 (独乙)	.15		
5日			
昼	.40		①
電車	□.□0		
下駄	□.13		
ハガキ	.10		
6			
昼□及□□	5.0		
電車			
干	.2		
図書館	.10		①
印紙			
7			
昼飯	.40		
鉛筆	.12		⊕
電車	.10		
8			
電車	.10		①
ノート	.14		
夕食	.24		

本代	.77	①
図書館	.5	
散髪	.20	

〔欄外数字一省略〕

## 大正二年四月収支一覽表

## 収入

20 + 10, + 1 x

## 支出

9〔日〕	博物館二回	.10	〔10銭、以下同様〕
	ハカキ	.10	
	西洋料理	.20	
	インク	.10	
10	昼食	.50	
	電車	.10	
11	遊就館二人	.10	①
	絵ハカキ	.10	
	郵便印紙	.10	
	ソバ	.28	
12	電車	.10	
13	印紙	.75	

〔欄外数字一省略〕

## 大正二年六月収支一覽表

1	.12	〔12銭、以下同様〕
京電切符	.60	
京坂	2.45	
市電	.35	
大学	20	

〔欄外計算式一省略〕

## 住所人名録

宇治山田市本町 大正二年四月此ニ転居ス

清原貞雄

## 大正四年当用日記（東京博文館発行）

一月七日 木曜

## 【藤井氏芸文申込／鹿田、東京目録申込】

三月十二日 金曜

【津田君の宅に三高会かある報知を得たか今日欠席状出した。なるべく事を簡単にするやうにせなければならぬことよ。明日ハ歌でも作りませう】早くも三月か来た。日記は白らへ〜と何も残されてゐない。草茫たる生活であった。たゞ忙しく忙しく思ふて日を暮してゐたので何もかも苦しいなつた。前田慧雲の余裕ある生活〔『楽しい人生』（大正名著文庫）至誠堂1915カ）と云ふものを読むやうに内田先生から注意せられたか、是れを読むと何んだか多少気かのびた。つまり余り多く仕事をしやうとすることかいけないので、気楽にやるべきで世間のことに九分位の力でやつてゐて宜い加減である。此頃ハ漸く落付いてきた。日記帳でも書けることハ余程落付いた証拠である。独乙語の日課でもやっていると世の中から離れて気楽である。明晩もやりませう。十二時十五分隊。

三月十四日 日曜

日曜ですか朝ハさむい。案内記の原稿か忙しいので何もせずそれにカゝつてゐる。十時半頃栗野君来宿、晚餐招待せらる。午後案内記の原稿をかく。六時前清原君来る。相つれ立ちて栗野君宅に行き牛肉会を開く。岡崎氏酔ふ。かへり来りて原稿の続きをやる。頭の工合よろしからずして一向捗らず。世に満たぬ思する。歌を作らば若かへる哉。

三月十五日 月曜

朝をそく起く。原稿かく。十一時頃魚澄君来訪。<sup>〔惣五郎〕</sup>初めて也。案内記原稿のことにて御閑になつたから少し助けると云ふのでいろ〜と御頼みをする。午後学校に行く。夜栗野君宅に行く。暫く学校にて三十分原稿かく。かへりて勉強せんとしたれとも昨夜来あたま悪し、いゝ加減にして臥床。十二時過。

十三時過臥床。

三月十六日 火曜

今日より旅行案内記第二期に入る。学校にて京都府全図見る。魚澄君の宅に行き旅行案内記原稿整理につき御手伝下さる様御願ひす。直ちに承諾あり。<sup>〔徳門〕</sup>石神君に途にて逢ふ。学校に行く途上なり。欧米の人類学雑誌の購入を諸教授に依頼したるが、石神氏ハ<sup>〔庄太郎〕</sup>米田先生に願はれたるに同研究室の方には金なし。米田先生ハ尚他ニ、ロンドン ロイアル インスチテュート オブ オン トコポロジー かよしと云はれたり。又氏云く、<sup>〔幾多郎〕</sup>西田先生はフオルクロアか初巻より古本にて出て居るのを幸に購入することを承諾せられたりと云ふ。図書館にてオーストラリアの原住民ノコトニツキテノ著書を調査す。午後、旅行記のことにつき三浦先生・魚澄君と共に書庫三階にて相談会を開き引きつゝ原稿整理。夜間同様。九時より帰宅、読史会記事原稿カク。一時臥床。

三月十七日 水曜

読史会例会。内田寛一君、南洋に於ける日本人の遺蹟。内田教授、早稲田学報の<sup>〔早苗〕</sup>高田学長の英国劍橋より牛津に至る視察に就ての批評にて、日本にても五山が文権を握り教育に与ること久しく続かば英国の両大学の如く宗教臭く僧院しみたる風のものとなるか否かと云ふことに就てなり。日本にては徳川時代の初期と明治維新に革命に近き教界の変動があったことを注意されたり。

三月十八日 木曜

旅行案内をやる。三浦教授は出校なし。読史会記事原稿は昨日来、昨日ハ読史会に渡さんとして渡し得す。今日は又三浦教授出校なき故に校閲を願ふを能はず。夜かへるとき其机上に置く。

三月十九日 金曜

朝八時頃に起きた。学校にては旅行案内を専心やる。午後九時より自宅にて<sup>〔Kurt Breysig〕</sup>ブライシッヒを読む。独乙語少し読む。読史会記事送る。

四月二十七日 火曜

清原君姉様病気に付、帰国の葉書到来。滞在ハ大分県東国東郡国東町栗林千五郎方。葉書ハ山陽柳井津より出ス。

四月二十九日 木曜

靖国神社祭礼ニ付休学。

大正四年当用日記補遺

商業史講義予定

一、 葡西蘭ノ東洋貿易

特許会社

日本徳川時代ノ貿易

支那印度

二、 露英仏独の商業発達

三、

(四) Russiaノ経済事情

(五) America

⑥ 支那

(六) 維新後日本ノ発達

住所人名録

名古屋市南区熱田東町字外土居四〇 寺沢重吉

宇治山田市一ノ木町一六

大正四、四月二十二日報知 井上以智為

〔挟み込みメモ二枚 (人名と数字) 一省略〕

大正八年当用日記 (東京博文館発行)

一月五日 日曜 晴

【講<sup>〔義〕</sup>□。歴史地理原稿。日本古代文化。

返信。牧の、今村、年賀状返】

京都に帰る。夕五時過家を出づ。

一月六日 月曜

Hoernes, <sup>〔ママ〕</sup>Lildene Kunst in Europa [Hoernes Moritz, *Urgeschichte der bildenden Kunst in Europa von den Anfängen bis um 500 v. Chr*カ]

岡崎氏方へ行く。十時過迄ハナス。

一月七日 火曜

Hoernes  
栗野氏方ニ行く。

一月八日 水曜 晴

【講、史、歴地】

午前九半—十散歩、十時半ヨリ講義。午後北坊ノ家ニ行く、かへる。岩橋君宅ニ行キ御伽草子壺返却。心ノ花もらふ。岡崎・<sup>〔惟一〕</sup>大溝氏来訪ありしも不在。湯浴。太古文化考ヘル。十二時臥。

一月九日 木曜 雨

【大溝、岡崎来】

世はずゝみ人はいゆけどわれのみはおくれてある  
かとさびしきこゝろ  
枯はてし心は君ををもへども底ひに湧くよろこび  
ばこず

一月十一日 土曜

午前図書館。仏教美術の沿革研究と其歴史。満濟校正。

一月十二日 日曜

【栗野君来訪、不在中】

ヴントノ民族心理学〔桑田芳蔵、文明書院1918〕読。  
Chamberlain, The child and childhood in Folk-thought [New York, 1896]

一時ヨリ大阪ニ帰ル。夜十二時<sup>〔既〕</sup>帰来。京坂中富枝。

一月十三日 月曜

日本古代文化原稿。Voltaire, Essai sur les Moeurs [Essai sur les moeurs et l'esprit des nations] ノ内ノ日本ノ部及ビ序論等ヲ読ム。

午後史蹟調査ノ唐人雁木ノ研究。朝鮮来聘記、渡辺蟻洲ノもの研究。コレハ渡辺蟻洲自筆の見聞記なること判明して、従前少々疑はしく思ひ居たる諸点を闡にし得たり。この書は延享五年朝鮮信使、淀ニ来るときの見聞記なり。中に自己のことを記せり。淀の饗応図も同筆なり。行烈<sup>〔列〕</sup>図も同筆なるべし。従って行烈<sup>〔列〕</sup>図ハ他にある行烈<sup>〔列〕</sup>図とは別のもの也。何れも自筆本なり。

夜ボルテール読ム。原稿記ス。満濟校訂。

一月十四日 火曜 晴

【原稿作る】

大溝惟一君本日出発、東京大学言語学研究室に転任のこと九日夜来宿の節物語しゆへ、本日早朝大溝氏の下鴨の宅訪問、出発時刻間合すところ、夫人出来つて大溝君死去したる由云ふ。驚愕す。本日午後一時密葬すべしと云ふ。十一日夜中突然発病、夫人は二階の物音と次で起る呻き声に上り見るに已に意識明ならず、半身不随の症状を起し、翌日<sup>〔降吉〕</sup>賀屋博士来診ありしも重態、次で逝去。津田、岡崎氏に電話、午後葬送す。

夜栗野氏来ル。原稿打合。原稿少し書く。満濟校正。

一月十五日 水曜 晴

午前原稿、午後同様。夜史蹟調査ノ朝鮮来聘記読む。十一時臥。満濟校正。

一月十六日 木曜 快晴

朝六時前目覚、又入眠。八時半起床。  
武専開講。一時間講義。武士勃興マデ。  
午後南禅寺ノ家ニ行キ掃除す。七時前までかゝる。  
帰来、沐浴、史蹟。朝鮮来聘記読む。満濟校正。  
十二時半臥。

一月十八日 土曜

午前江馬氏ニ電話にて大溝氏ノこと言ひ、香資のこと言ふ。江馬氏ハ独りにて香資を出したりと云へり。故ニ小生立替之こと言はず、二重になりたれどもそれにてよろし。

今西氏ニ史学研究会講演二月に願ふこと頼む。承諾されたり。

一月十九日 日曜 雨

午前片付、午後上代文化書く。梅原氏来、史蹟調査ノ報告ニツキ協議、六時かへる。夜上代文化原稿書く。十一時半臥。

一月二十日 月曜

【桑原先生ニ今西氏講演のこと言ふこと。朝原稿。

夜史蹟。昼大学講原稿、史原稿】

朝講原。午後研究室、栗野氏行く。夜八時半まで梅原氏と史蹟のこと書く。

一月二十一日 火曜

午前続日本紀読む。午後府庁行く。夜文化原稿書く。

一月二十二日 水曜

午前文化書く。ヴント読む。講原稿ノ為め研究室に行く。六時、参考書持かへる。夜読書。本朝通鑑。

一月二十三日 木曜 晴

午前起床後、武専の準備。武専講義後帰宅。午後講義原稿書く。武専ハ秩満解任ノ徒ノコトヲ云フ。講義ハ貨幣使用か社会問題ヲ惹起スルコト。

夜岡崎氏宅十時半迄。夜小島君ヲ訪ヒタレトモ感冒ニテ臥床ノ由。<sup>〔祐馬〕</sup>

一月二十四日 金曜 後雨

午前文化の文訂正。午後史蹟の写真版撮影せしむる為め研究室に行く。夜訂正。午後、岡崎君来訪不在。

一月二十五日 土曜 雨

【午後今宮神社ノ天治ノ仏像見ニ行クコト】

午前古代文化の原稿字句修正了。午後栗野氏宅マデ持行ク挿画ニスベキモノ二三未だ出来上らざる為め、大学に行き朝鮮古蹟図譜第二を借出し、考古学研究报告第一冊を持行き桑名に複写を命じたり。夜、北野天神に参詣したり。帰後満濟校正。

一月二十七日 日曜

【〔朱筆〕「×」黒板博士ニ手紙出スコト。

大島徹水氏来宅アルベシ】

〔以下朱筆〕書齋掃除。午後岡崎来、大島氏来。五時過頃迄談話。大島氏要件ハ北野御前通阿弥陀寺ノ慈雲和尚ノ史蹟ヲ調査スベキコトナリ。

夜三浦先生宅訪。富森氏在り、後又橋川氏来ル。故ニ用件言ハズカヘル。

日本儒学史〔久保天随、博文館1904年カ〕。満濟校正。〔以上朱筆〕

一月二十七日 月曜

【〔朱筆〕「観音寺。黒板。大阪中村盛文堂】

書齋掃除。午後学校。夜満濟校正。

〔奥遊〕日野講師宅火災之為メ、令息令嬢五人惨死ノ御見舞として烏丸出水の和田琳態氏邸御見舞に行く。杉本哲三氏宅かへりよりて大溝惟一君ノ追悼会のことを相談。梅原末治君ノ独乙語教授のこと依頼したれども、杉本君承引せず。

一月二十八日 火曜

午前栗野君来、午後四時迄居たり。史蹟実地踏査、国民教化の為め講習会開催のことを相談す。

午後岩橋君宅。帰来後、本朝通鑑。

一月二十九日 水曜

午前読書。午後学校。日本鉱業志〔大橋新太郎『日本鉱業誌』1911カ〕、懐風藻見ル。七時かヘル。夜原稿



作。

一月三十日 木曜

午前武専教授、午後講原作。夜三浦先生宅例ノ件御断り申上ぐ。満校正。

一月三十一日 金曜

朝手紙かく。

黒板博士、史蹟調査序言依頼。

中村盛文堂、史林印刷を早くすることを言ひやる。

観音寺、秀次秀頼書状借受の件依頼。

読史会、講演準備。

夕栗野氏宅、史学地理学同攻会<sup>〔ママ〕</sup>のものよりにて、講習会、実地踏査ノこと相談と云ふによりて行く。

植村<sup>〔清之助〕</sup>、中村<sup>〔直勝〕</sup>二氏会。

読史会<sup>〔登〕</sup>。鈴木、三浦先生の講演あり。小生ハ時間なきためやらず。鈴木氏郷土の話五十分。三浦博士小牧ノ役ノ話二時間あり。

二月一日 土曜 晴 暖

午前本通読ム。満校正。

午後、散髪、沐浴。かへり路岡崎公園にて大阪の浦野義隆君に会ふ。府会のことなど話す。

夜坂口先生宅、三十分。岡崎君宅訪問。十一時かへる。近日疲れたる感あるため眠む。

二月二日 日曜 晴 暖後くもり雪

【昼今宮神社。夜史、満。岡部之戒禪師来状】

今宮よりの帰途、船岡山の石仏を見に行く。近世のものなるべし。石面葎煙してよく見えず。寒気骨にしみ雪ふること屢々なり。

午前朝遅し。本朝通鑑見る。

午後今宮神社にある天治の石仏を見るため梅原君を誘ひ行く。十二時前家を出で、正二時神社着。石仏、古地図二葉、古文書見る。地図ハ徳川初期のものならん。一枚ハ隆忠と云ふ社務の名あるによりて寛文の頃なるを知る。他も先づ同じ頃ならん。

古文書ハ建武のもの最古。大抵ハ足利氏の御教書にて馬を寄進のことなり。夜読書。一時半臥。満校正少し多くやる。

二月三日 月曜

【雪積む。夕史蹟調査のこと調査。聚楽第ノこと調査】

午前朝遅し。午後大学に行く。黒川真頼全集、新唐書等読む。

一時頃大鏡閣の面家莊吉氏来る。文化史図録のこと相談し催促さる。日本歴史図録、法隆寺大鏡壁画のものなど見せ、大に立派なる図録を作製すること我国にて必要なりと云ふ。

夜満校正。少し読書したるが頭重く気分勝れさる感ある故、早く臥床十一時過。

二月四日 火曜 晴 寒強し

朝遅し。朝昼在宅読書。夕散歩、四条迄行く。夜満済校正。

二月五日 水曜

講義原稿少し書く。午後大学三時より七時迄あり。八時帰宅、岡崎君来。十時過頃雑談。小散歩、其より講原稿。二時頃迄かゝる。

【武専校長劉須氏退職、西久保弘道氏新任】

二月六日 木曜

朝遅く起き武専行く。其後大学図書館にて調査する。五時講義済み帰宅。散歩。十二時半臥。

二月七日 金曜

午前。

午後大学。満校。武専校長ノ送迎会。八時帰、史蹟調査。聚楽第ノ史料蒐ム。

八時前送迎会よりかへり中村氏による。不在。本かりてかへる。

史料綱文かりてかへりたるものよみて聚楽に関する

るもの集む。

二月八日 土曜

【聚楽校、図書館、新村／遠足／夜、米国使視察談。  
講原。武専原。満】

朝東山中学ニテ津田貞祥氏〔府立五中教諭〕ニ逢ヒ、  
離宮八幡神社古図借用を依頼す。礎石のことは都  
名勝所図会にもありと云ふ。

其より大学に行き、史料綱文かへす。十一時より  
岩橋君と共に聚楽小学校に行き聚楽第の古図を見  
る。海北友松の原図より出でたりとする天保のも  
のを更に写したる也。古文書、秀吉朱印、家康朱  
印を有す。聚楽町の記録もあり。

奥村氏来り談話。湯に行く。食後暫くして読書。  
後臥床に入りて満済校正。十二時過。

【午前より雪ふりてつもる】

二月九日 日曜

朝早起、表具師来ル。襖等張かへの為也。続日本  
紀読む。

午後食後、日本時代史読みて秀吉聚楽築造の条読む。  
岡崎氏来る。電灯つくまで居る。雑談。後時代史  
と続紀読む。夕食後四条迄散歩、十時より読書。  
満校如例。

【朝雪白し】

二月十日 月曜

午前。大学に行く。中村氏家ニ借りたる本を持行く。  
家人不在に付、大学まで持行き中村君に言ひ持帰  
りのこと頼む。

史蹟調査聚<sup>〔ママ〕</sup>落第のこと調査。归来、夜散歩せず  
読書、続紀。十二時寐。

二月十一日 火曜

午前読書。午後一燈園まで行く。<sup>〔西田〕</sup>天香及夫人とも  
不在。大工来。靈異記読。手紙、栗本。

夜大西氏、奥村氏方来。

十一時より講義原稿作る。二頁書。余目録とす。  
一時半臥。

二月十二日 水曜

午前講義原稿、午後同。手紙書く、家。

北野神社宮司ニ歴史と地理送る。夜小散歩。講義  
原稿書く間寒し。二時頃過。

二月十三日 木曜

九時起床。十時半武専。一時半より下調。

夜買物に行き乱れ籠、ペン皿、ピン等買ふ。十二  
時臥。

学校にて大山崎観音寺より来る書状、文書借用の  
もの也。

二月十四日 金曜

午前家にて押入れに使用する夜具の台を作る。午  
後大学史林の編纂会あり。五時了、帰宅。

小島祐馬君来、十時迄談。病気快癒されたる故なり。  
沐浴に行く。十一時かへり読書。

二月十六日 日曜

午後大文字山ニ登ル。五時かへり、浜寺電話。十  
時過家出ラレ大阪ニ行ク。十二時天満橋着。一時  
前家ニカヘル。

二月十七日 月曜 快晴

八時過ナリて起床、湯ニ行き、十二時着衣服。二  
時半過高津湯豆腐屋ニ行ク。式四時頃初マリ写真  
トリ宴飲アリ。九時半自動車ニテ梅田駅ニ向フ。  
十時五十六分ノ汽車ニテ出発、七条駅十二時、自  
動車ニテ自宅着。一時就床。

二月十八日 火曜

朝起床遅し昼。奥村氏及一燈園挨拶に行く。坂口  
博士よりの祝品来りありたり。

二月十九日 水曜  
原稿。

二月二十日 木曜  
午前小散策。小島君ニ出逢ふ。報告をした。  
買物に行く。  
〔朱筆〕「満校」

二月二十一日 金曜  
【〔朱筆〕「写真機。<sup>〔真澄〕</sup>近重原稿送附。出張】  
史林編纂会（予備会）。

二月二十二日 土曜  
【山城ノ図持行クコト。桑名来。】  
雨降りたる故山城図持ち行かず。  
午後史学研究会あり。岡崎氏と共に栗野君宅に行く。  
国民教化講座のこと談話。千本今出川の牛肉店に  
入りて相談す。二氏に結婚のこと話す。  
夕より夜中雨ふる。明日谷本氏行くこと能はさる  
べしと思ふ。

二月二十三日 日曜  
朝遅く坂口氏行く。一家中風邪の為め臥床さる。  
名刺のみ出してかへる。途中より雨霽れたるを以  
て谷本氏に電話にて断ることをやめて、停車場に  
向ひ芦屋に行く。丸太町寺町ノ電車のりかへ場  
にて栗野君に会ふ。紹介す。かきやにて菓子カステ  
ーラを買ひて行く。芦屋より大阪にかへり天然寺  
による。十時頃なり。大急にて京都行に行き、一時  
頃帰宅。浜寺は母病気の報ありて行かず。

二月二十四日 月曜  
史林編纂会あり。小生分担の原稿、朝研究室にて  
書きたれとも出来ず。午後三時より編纂会。三浦、  
浜田、其他委員出席。三浦博士に結婚のこと申す。  
岩橋氏と共にかへり、黒谷前の通りに出る手前  
のところにて結婚のこと話す。岩橋氏略承知したと

云ふ。是れは小使森口か兩三日（水曜か）に宅  
に回章持ち来るとき見たりと云ひ、且つ郵便の来  
たる為めに知ると云ふ。

原・内藤・喜田三先生に書状かく。

二月二十五日 火曜  
雨降る。

二月二十六日 水曜  
原稿書く。

二月二十七日 木曜  
講義、武専、大学奴婢。寺町まで行く。

三月一日 土曜  
大学記念日。道子、講演聞きに行く。浜田、<sup>〔源治郎〕</sup>浜部  
氏講師。ポンペイ発掘。浜部氏、飛行機にのって。  
大溝君追悼会。  
国民教化講座第一回。

三月二日 日曜  
朝から榊、藤代、栗野、清原、岡崎氏<sup>〔ママ〕</sup>ノ行く。

三月三日 月曜  
大学にて研究室にて研究。本日ハ朝鮮国李太王の  
国葬にて休学の日なり。研究室には喜田博士あり。  
原博士とは正門入口の所にて出逢ふ。三浦博士又  
研究室に来らる。  
史蹟調査のこと調査。

三月四日 火曜  
大学に行く。言経卿記<sup>〔籍〕</sup>尋ね書籍整理をする。かへる。  
中尾松枝氏来られあり。夕食を共にす。共に出で、  
送る。読書。  
朝、三浦博士著法制史の研究〔岩波書店1919〕の原  
稿書き終りて三浦博士手元まで出す。

三月五日 水曜

原稿書く。

夕方谷本氏来らる。書状かねて受取る。午後三時頃、断の葉書来る。夜に入りて谷本氏来訪、断り状出したること忘れられたりと云ふ。花専の軸祝として賜ふ。表装も済みたれはとて即時床に懸く。一時半臥床。

三月六日 木曜

朝少し起きること早し。

武専—平安末期

大学—平安期□□文化と其特質

史蹟調査、参考書持かへる。

中桐確太郎氏宛手紙かく。

三月七日 金曜

学校に行く。史蹟調査のこと。満済やる。

三月八日 土曜 雨 暖

大学。夜天香氏来る。風呂に行く。十二時臥床。

三月九日 日曜

六時起く。大阪に行く。七時半出発。八時十分四条より九時半天満、十時前梅田。大西母出逢ひ、中川耒助氏行く。岩田文雄氏行く。岩田氏にてすし御馳走になり大阪にかへる。大西母は間もなく帰浜。夜、雨少しやみたる故、買物に行く。灘万にてかま鉾、厚焼かひ、大西母の土産にする。

三月十日 月曜

朝沐浴。九時出発。車にて清田、加藤に行き、直ちに難波より浜寺に行く。十二時なり。昼飯御馳走になり、永江、富永、今井、油谷行く。今井、油谷にてハ上りて談話す。九時頃かへり泊す。一時<sup>(ママ)</sup>床臥。

三月十一日 火曜

【自宅には<sup>(亮三郎)</sup>榊先生より祝品。宇野、高階来る、不在。天香氏来る。岡崎氏来る。岡崎君ハ本日も来る】

八時起床。湯に行き朝食後用意して出発間際、小林婆さん来る。二時頃出発。四時頃着。電車中にて満校正。夜日記つける。

三月二十二日 土曜

【黒板氏手紙】

三月二十三日 日曜

内田先生・原先生ニ挨拶ニ廻ル。カヘリ坂口先生宅ニテ談シス。九時カヘル。

三月二十四日 月曜

辻善之助・八代国治二氏、東京ヨリ来学ニ就キ八時大学ニ行ク。

三月二十五日 火曜

辻善之助・八代国治二氏歓迎会。

三月二十六日 水曜

在宅。

三月二十七日 木曜

午前大学。二時頃カヘル。中村君不在中來ル。

三月二十八日 金曜

中村君学校ニテ逢フ。

三月二十九日 土曜

朝学校、仁和寺借用文書撮影。二時頃終り、其レヨリ国民教化講座ノ準備。六時カヘリ七時家ヲ出テ家政女学校ノ会場ニテ八時半ヨリ講演。十一時カヘル。少シ用事シテ臥床。

三月三十日 日曜

午後、中村直勝君夫人同伴ニテ来訪アリ。夜読書、原稿少シクカク。

三月三十一日 月曜

三上庄次郎（活版所）に行く。京都府史蹟勝地調査会報告印刷ノ件ノ為メ也。

午後、三浦先生・桑原先生まで挨拶ニ行ク。三浦先生不在、奥様玄関にて出られ挨拶ヲ受ケラル。桑原先生一時間余諸々ノ物語アリ。カヘリ岩橋君宅訪フ。夜原稿書ク。

四月二日 水曜

午前、聚楽城研究、満濟准后日記校正、投函。午後大学に行く。四時ヨリ聚楽小学校ニ行ク。中村校長ニ会ヒ太閤朱印撮影ノコト願フ。木戸竹次郎氏ノ案内ニテ梅雨ノ井、聚楽城ノ庭園中ノモチノ木、濠池ノ跡等ヲ見ル。八時頃カヘル。疲労。読書、原稿。

四月三日 木曜

午前机辺掃除、手紙書ク。午後仁和寺に古文書（延暦売券等、公験目録）を返す為めに行く。道子同道。夜八時半帰ル。十一時ヨリ聚楽第ノ原稿カク。一時過臥床。

四月四日 金曜

午前。  
午後、飯島象太郎君来訪、間もなく梅原君来る。夜稍静平にして研究上ノ事項考按。

五月十五日 木曜

講義 延喜天曆之話。

五月十六日 金曜

【特別研究 道長ト其時代（洋野紙ニカク）】  
五時起床。

六月十五日 日曜

知恩院夏安居高等講習会。国民思想史概説。

六月二十二日 日曜

【午前】

六月二十三日 月曜

【史蹟予習。午前十一時府庁。午後大学、満濟。午後五時夕食。午後六時国民教化講座、八時済九時帰宅】

七月一日 火曜

午後二時頃大島徹水師来。明日平和祝祭トシテ家政女学校ニテ講演頼マル。其中ニ岩橋君来。

七月四日 金曜

清原君神道史〔清原貞雄『神道沿革史論』大鏡閣1919〕学校ニ来テアリ。読ム。御堂関白記読ム。栗野君宅ニ世界大戦史返戻旁清原君ノ神道史ヲ渡ス。魚澄君ノモノモ渡シ置ク。

夜満濟准后日記校正。清原君ニ礼状書ク。雑誌無尽灯、仏教団時ノ薬法、及雑誌現代之科学ヲ読ム。朝、平安朝史草説考按。

七月五日 土曜

【考按。府庁。六日出張先。贈位ノコト】

九月一日 月曜

史林編纂会、午後一時ヨリナリ。午前九時頃大学ニ行ク。内田博士逝去ノ原稿カク。編纂会午後五時迄カ、ル。

九月四日 木曜

夜講義草稿カク。十二時臥。



九月七日 日曜

午前内田先生宅、十二時カヘル。午後書齋とりかたづけ。夜鹿ヶ谷ニ大踊アリ。読書。十二時臥。

九月八日 月曜

午前大学ニ行ク。弁当持チ四時迄ゐる。内田先生宅ニ芸文（内田先生追悼号）三冊とゞける。川俣ニテ名刺注文。<sup>（機）</sup>天沼氏宅史林原稿ヲ依頼スル。古建築ノ葉ヲ依頼。承諾セラル。史林ノバックナンバー見セルコト、送ルヘキコトヲ約ス。六時帰、入湯七時、食事、散歩小時、読書。グレトン中等階級〔Richard H. Gretton, *The English middle class*, 1917〕ヲ読ム。満濟校正。十二時半臥。

九月九日 火曜

午前内田先生宅。<sup>（竹林鶴彦）</sup>武林君と共に遺稿ノコト整理。卒業生ノ追悼会ノコト相談。其より大学研究室。<sup>（真喜）</sup>狩野部長より史林ノ挿画として唐人書する毛詩の写真版借受けて国史研究室ニ行く。中食。維新史ニ関スル洋書読ム。四時出で、原稿紙誂ヘル。大雨。雨に濡るゝ。服大に汚る。夜、内田先生ノ追悼記ノコト考ふ。

九月十日 水曜

【月、十六夜也。雨にて見ヘズ。深夜晴れて月光窓外ニ見ゆ】

午前雨大に降る。

内田先生宅に行くを中止して内田先生追悼記のこと考へ、午後同前。

夜散歩。原稿紙の誂文十六日出来ると云ふ。価参円九十銭。千枚ノ値也。追悼記書く。

牧野君ニ手紙。令弟ノ死去ニツキ弔詞及香資一円。

内田先生追悼記ノコト報ズ。

満濟校正。十二時過臥。

九月十一日 木曜

午前追悼記考フ。

九月十六日 火曜

夜遅シ。

九月十七日 水曜

講義、幕末史第一回。仏教大学〔現龍谷大学〕ハ速夜ニツキ休講。坂本氏来ル。夜岡崎氏来ル。

九月十八日 木曜

雨夜大ニ降ル。向坂君宅ニ行カントスルガ雨ノ為メ中止ス。夜満濟校正スル。多ク進行サス。但シ少シノコル。

九月十九日 金曜

内田先生追悼記一寸見ル。後学校ニ行ク。牧野君ノ分モ共ニシテ大学ニテ事務室田中君ニ渡ス。研究室ニテ井上円了先生追悼録、東洋哲学ノ増大号読ム。中食後、満濟校正少シスル。竹林氏来る。内田先生書物大学寄托ノ件ニツキ相談。明日ノ追悼会ノコトモ打合ス。電話ニテ二条妙満寺ニ決定ヲ云フ。

史林編纂会四時マデ。研究室内の場所ヲ変ヘルコトニツキ相談。夜岡崎君明日出発ニツキ其宿ニ行ク。二十円借りテ内田先生ノ追悼会費用トシ妙満寺ニ行ク。明日ノコト打合セ、其レヨリ丸太町ノ紙屋ニテ罫紙ノ注文セルモノヲトリニ行ク。出来テ居ラズ。向坂君宅ニ行き、坂本氏ノコト依頼ス。帰宅後満濟校正シ多ク進行サス。貨幣ノコト研究案ヲツクル。一時寐。

【朝雨、午後霽】

九月二十日 土曜

午前内田先生宅ニ行ク。奥様に本日法要のこと案内する。岡崎君に行く。二十円返却、旅装を手伝ふ。其より帰宅して二時過妙満寺に行く。昼は岡崎氏と共に学生集会所にて食事。内田先生追悼会は三時半よりはしまる。奥様の御参詣あり。四時半終。

以後学生等と共に記念事業のこと相談したり。油絵二面調整之上研究室及び御宅に献上することと決す。六時散会。米沢氏と共に八新にて食事、かぎやにて菓子食して帰る。

入唐求法巡礼行記読む。

九月二十四日 水曜

秋季皇霊祭。午後東山將軍塚ニ上ル。夜早寐。

九月二十五日 木曜

講義下調と講演ノ下調。夜遅クナル。

九月二十六日 金曜

講義。後読史会ノ講演スルニツキ下調。

夜読史会。<sup>〔豊栄〕</sup>源君、道元禪師ノコト。余、菅太仲先生と福山藩教育。三浦先生、戦国時代武士ノ自叙伝。

九月二十七日 土曜

研究室ノ整理と云ふので学校に行く。午後かへり小寝。夜、大津ノ国民講座ノ講演に行く。

九月二十八日 日曜

祓禊考読む。

午後、洛西ノ御土居ノ現状見に行く。太秦ヨリかへる。坂本氏来ル。

九月三十日 火曜

午前読書。午後、学校ニ行クトコロ記録研究のことにつき狩の部長より云はる。其れの調書つくる。

十月一日 水曜

記録の研究についての調査する。講義休み。午後教授会に出で、記録研究のこと説明スル。

十月二日 木曜

朝原稿ツクル。午後学校ニ行ク。読書。美術大観

等読ム。夜原稿ツクル。学校ヨリカヘルトキ大西母来宅シテアリ。談話シ九時半ヨリ原稿ツクル。三時マデカ、ル。

十月三日 金曜

朝早く起きて講義ニ行ク。大西母かヘル。二時かへり食事。小時間寐る。後散歩する。三浦先生に手紙かく。午後二時出ス。

十月四日 土曜

午前読書。午後、史学研究会にて聴講に行く。曲舞について、岩橋小弥太君。ロマンチック時代の一青年史家ノ生立、坂口先生。坂口先生のはランケの青年時代ノコトヲ云ハル。

夜、坂本卓章君来て松浦嘉三郎君来ル。共に談話ス。梅原末治君学部雑用の為め来ル筈ノ処来ラズ。

十月五日 日曜

【心地あしき天候なり。面家氏手紙出ス】

午前手紙かく。

一燈園来ル。午後京都ホテルに<sup>〔Elizabeth Anna Gordon〕</sup>ゴルドン夫人を訪問スル通弁ヲ頼マル。行きて夫人に会ふ。種々の談話をなす。

夜、岩橋君宅ニ行キ三十分談ス。かへりて今夜ハ早く寐ル。

十月六日 月曜

【向坂君電話アリ】

午前、六条活版所主来ル。校正ノコト打合ス。午後研究室。幕末史研究。六時半ヨリ留学助教授送別。<sup>〔宇〕</sup>羽田、<sup>〔正造〕</sup>園、<sup>〔清作〕</sup>菊川氏来賓。八時済む。十時ヨリ読書。解放十月号読ム。栄花物語を読ム。

十月十日 金曜

【大阪へ行クコト】